公開資料

戦略的創造研究推進事業
（社会技術研究開発）
研究開発実施進捗報告書

「安全な暮らしをつくる新しい公／私空間の構築」
研究開発領域
「トラウマへの気づきを高める
“人 - 地域 - 社会”によるケアシステムの構築」

大岡　由佳
（武庫川女子短期大学部　准教授）

注：本報告書は、当初設定された研究開発期間（平成 29 年 10 月～令和 3 年 3 月）の実施の進捗を報告するものである。なお、本プロジェクトは令和 3 年 4 月より「研究開発成果の定着に向けた支援制度」の適用を受け、研究開発期間が令和 5 年 3 月（予定）まで延長となっている。

目次

Ⅰ．本研究開発実施報告書サマリー 3

Ⅱ．本編 4

１．プロジェクトの達成目標 4
　１－１．プロジェクトの達成目標 4
　１－２．プロジェクトの位置づけ 6

２．研究開発の実施内容 8
　２－１．実施項目およびその全体像 8
　２－２．実施内容 9

３．研究開発成果 18
　３－１．目標の達成状況 18
　３－２．研究開発成果 19

４．領域目標達成への貢献等 22
　４－１．領域目標達成への貢献 22
　４－２．プロジェクト共通の課題への貢献 22

５．研究開発の実施体制 23
　５－１．研究開発実施体制の構成図 23
　５－２．研究開発実施者 23
　５－３．研究開発の協力者 27

６．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など 30
　６－１．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など 30
　６－２．論文発表 40
　６－３．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） 42
　６－４．新聞報道・投稿、受賞など 45
　６－５．特許出願 46

７．領域のプロジェクトマネジメントについてのご意見や改善提案（任意） 46

８．その他（任意） 46

Ⅰ．本研究開発実施報告書サマリー

人の弱さや傷に敏感になってそっと寄り添えるトラウマインフォームドな社会とは、＜公＞と＜私＞の隔たりが少ない社会であり、人が孤立無援になりにくい社会である。性暴力や虐待、その他の対人暴力等の被害に遭ったときに、躊躇わずに“助けて”と SOS を出せる、当事者のその SOS に支援者が気づき受け止め、適切な機関につなぐことのできる社会である。また、支援者・関係機関がタテではなく横でつながり、当事者に二次被害を与えることなく、協働して実働できるシステムを有した社会でもある。そのような社会は、誰にとっても、安全・安心に暮らせる社会となると考え、本研究開発では、社会全体がトラウマインフォームドに変化し、様々な傷つきを抱える当事者のトラウマを軽減し、包摂できる共生社会を目指して、医療、地域、WEB における実践研究を行ってきた。

具体的には本 PJ では、TIC の視点を土台に、医療実践、地域実践、WEB 実践に分けて、トラウマインフォームドな研究開発を行ってきた。それぞれの研究開発領域において、Realize（トラウマの影響を理解）し、Recognize（トラウマのサインに気づく）して、Respond（トラウマインフォームドケアの実践）を行っていくこと、Resist re-traumatization（再トラウマを招かない）ことを目指した。本 PJ の強みは、何よりも現場の“困ったこと”“困った人”に対して、どのように関与していけるかを現場から考え、発信していくことにあった。決して上から目線ではなく、当事者とともに、どのようにしたら、よりよい支援現場が作り上げることが出来るかについて、検討を進めてきた。

医療実践では、病院におけるトラウマインフォームドな研修等を多様多彩に実施し、人々に TIC 概念の普及を行おうと努めてきた。性暴力被害者を対象とした医療マニュアルや、DV のジャーニーマップの作成、TIC プログラムの実施を含め、医療関係者が適切なトラウマインフォームドな関わりができるようにし、当事者が孤独を深め支援から断ち切れない研究開発を行ってきた。また TIC に絡むワークショップ等開催による病院を挙げた取り組みが、院内連携を促進することにつながり、病院組織全体を変容させてきた。

地域実践では、学校や民間支援団体において、TIC の知見を広めていくための様々な仕掛けづくりを行ってきた。学校においては、教職員に性暴力対応等を伝える手引きを作成したり、研修を行い学校と対話を重ねることで、TIC 概念の共有を図ってきた。また、民間支援団体等に参画してもらい開発した WEB 構築（KYOTO SCOPE）では、多様な公的機関・民間機関を巻き込み、TIC の発想をもって支援できる体制を構築し、京都の地でリプロダクティブヘルスの発展に寄与した。WEB 実践では、バーチャルワンストップ支援センターの運用をめぐり、全国の実態調査により現状把握をし、今後の性暴力被害者支援にトラウマインフォームドな視点をもって関わっていく仕組みモデルを考案した。TIC の視点の研究開発においては、上記の医療・地域・WEB 実践で活用してもらうべく、海外の知見等を踏まえて TIC の概念を整理し、リーフレット作成やシンポジウム開催を行った。また、市民に向けて「トラウマ展」を開催するなど、TIC 概念と支援者のみならず、市民への広げていく大きな挑戦に挑んだ。

今後は、本研究開発の TIC 基盤部分の社会への定着を行うべく、「研究開発成果の定着に向けた支援制度の適用」を受けることになった。

Ⅱ．本編

１．プロジェクトの達成目標

１－１．プロジェクトの達成目標

【達成しようとする目標】

TIC（トラウマインフォームドなケア）の概念を土台に、バーチャル実践、地域実践、医療実践を行うことにより、人や地域、そして社会を変えていくことに目標に置く。具体的な目標は以下の通り。

1)バーチャル（WEB）実践

グループ名：公私をつなぐバーチャル・ワンストップ支援センターグループ（公私をつなぐバーチャル G)

・ワンストップ支援センター調査により性暴力被害者支援の現状把握および包括的行政関与の必要性を提言
・メール相談の実施により、ネット空間から現実世界の支援につなげるノウハウ蓄積
・WEB 実践の有効活用・普及の手立ての提案

[成果の受け手]

・実際に性暴力被害にあった当事者;様々な情報から自身に必要な情報を選択し相談に至ることができる。
・被害者支援を行う支援者ならびに地方公共団体の施策担当者;最新の情報を相互に交換できる。

[活動目標]

・「バーチャル・ワンストップ支援センター」の評価数値＝アクセス数と分布が評価指標となる。（数値目標：年間 10000 カウント）

2)地域実践

グループ名：潜在的な子ども被害・学校対応グループ（潜在的な子ども被害・学校対応 G)
教職員の対応研修グループ（教職員の対応研修 G)
SDoH 地域資源連携グループ（SDoH 地域資源連携 G)

・学校における潜在的なトラウマ体験（虐待や性被害を含む）を抱えた子どもへの対応方法の確立
・教職員および地域で子どもにかかわる大人への性暴力被害の早期発見・早期対応（二次予防）
・女性支援に関わる地域社会資源の連携システム（SDoH）構築

[成果の受け手]

・教職員（養護教諭など）；学校で不適応を起こした子どもたちの理解につながる。
　子ども；学校で被害を開示した子どもたちが支援につながりやすくなる。

・地域の行政支援機関等；虐待や DV、発達障害や依存症などトラウマや生きづらさを抱えた女性が適切な支援を受けることで、若年妊娠を繰り返したり虐待のハイリスクの環境のまま出産するケースを未然に防ぐことで虐待の連鎖を防ぎ、支援にかかる負担が軽減される。

［活動目標］

・学校研修の実施　年 3 回開催

・学校及び地域の子どもが集まる施設、養護施設等での研修（年 5-6 回）

・学校における性被害対応ガイドライン作成・提言

・社会資源連携会議を初回以降４ヶ月ごとに開催

3)医療実践

グループ名：病院のソーシャルワーク機能拡充グループ（病院の SW 機能拡充 G）
性暴力被害者支援医療マニュアルグループ（性暴力被害者支援医療マニュアル G）
病院 TIC 実践：京都グループ（病院 TIC 実践：京都 G）
病院 TIC 実践：兵庫グループ（病院 TIC 実践：兵庫 G）

・病院での社会的孤立女性に対するソーシャルワークの実態解明
・女性支援 SW チーム養成講座の確立と全国展開
・性暴力被害者支援医療マニュアル作成
・急性期高度救急医療を担う総合病院におけるトラウマに配慮したケア

［成果の受け手］

・総合病院産婦人科に受診した社会的孤立女性;エンパワメントされて支援を受けやすくなり、より社会的な健康を得て次世代育成への準備が可能となる。

・医療者；適切な対応のヒントが得られ、結果的に疾病治療にも専念しやすくなる。

・司法執行機関;改正刑法や司法面接の知見も盛り込んだ日本で初の対応マニュアルの作成によりトラウマに配慮した急性期対応がしやすくなる。

・医療現場でのトラウマ体験をもつ患者とその家族、対応した医療従事者：トラウマ体験を表出することにより心理・生活面に配慮した医療を提供することができ、病院に対する信頼感が醸成される。その結果、医療スタッフのメンタルストレスも軽減できることを目的とする。

［活動目標］

・産婦人科医、助産師、看護師、医療ソーシャルワーカーなどの専門職を対象としたソーシャルワークチーム養成講座をシリーズ開催

・ソーシャルワークチーム養成に至る過程の教科書化、DVD 化→日本ヘルスプロモーティングホスピタル連盟でのコンテンツ共有による病院への展開、日本プライマリケア連合学会や女性保険医療セミナーでのコンテンツ共有によるクリニックへの展開、性暴力被害者支

援の医療機関対象講座での利用など
・ソーシャルワークチーム機能による医療者負担の変化に関する質的分析
・医療スタッフに対するアンケート調査、患者とその家族へのナラティブな聞き取り

4) トラウマインフォームドな視点の共有

グループ名：トラウマインフォームド（TIC）研修グループ（トラウマインフォームド（TIC）研修 G）

・TIC の海外技術知見の普及 ・TIC 研修の実施と効果の検証

[成果の受け手]
・全グループ研究の土台となる技術の開発・普及を目指す。
・TIC 実践を進めていく医療機関等の対人援助職；TIC 対応ができるようになることで、支援がスムーズに行える。
・当事者；周囲の支援者が適切な対応をすることで、二次被害が軽減される。
[活動目標]
・TIC 研修、研修（前後）評価の実施（年 2 回）

１－２．プロジェクトの位置づけ

1)バーチャル（WEB）実践

[公私をつなぐバーチャル G]
ウェブ上のワンストップ支援センターとして、支援機関の検索機能だけでなく、電話相談や面談が困難な当事者を現実の支援につなげるためのメール相談を導入し、特にコロナ下では相談件数が急増した。本グループでは、語りにくい性暴力被害をリアルな支援（電話相談・面接相談）につなげるためのメール相談と、支援ネットワーク形成による、トラウマインフォームドな仕組みの構築に寄与した。

2)地域実践

[潜在的な子ども被害・学校対応 G]
コロナ禍の中で、学校はその対応に追われて、TIC 研修のために時間を割くことが物理的にできなくなった。子どもに対する公・私の情報量の隔たり（「公（トラウマが見えない）」と「私（トラウマに気づける）」の隔たり）の広がりが増大されたこともあり、本グループでは、学校における潜在的な子どもの被害実態の明確化とその TIC 対応の確立に向けて、研修等を研究開発成果の定着に向けた支援制度の中で行っていくことにした。
[教職員の対応研修 G]
コロナ禍の中で、「危機対応の手引き」の作成は遅延したものの、教職員および地域で子どもにかかわる大人への性暴力被害の早期発見・早期対応（二次予防）につながる取り組み・

研修を行おうとした。多職種とワークショップを重ねて練り上げ、顔の見えるネットワーク形成が解決策と考えた。

[SDoH 地域資源連携 G /病院の SW 機能拡充 G]

課題は、社会的に孤立状態にある女性たちを、地域の支援の輪にいかに組み込むかである。新型コロナウィルスの感染対策のために、DV が深刻化し、産後うつが増加し、女性の自殺が増えるなかこの課題の重要性は増した。本グループでは、病院職員と地域の支援機関職員が顔の見える関係で互いの役割を理解しネットワークを構築することを解決策とした。

3) 医療実践

[病院 TIC 実践：京都 G/病院の SW 機能拡充 G]

多忙な病院職員が、患者の社会的困難さに気づいても適切なケアは属人的になりやすく、個々の職員が疲弊しやすいことが課題であり、ソーシャルワークチーム養成講座開催にて病院が組織的なケア体制を構築することを解決策としていた。新型コロナウィルスの感染対策のために、職員の業務は更に膨れ上がり、また、感染対策のために患者と密なコミュニケーションが取りにくくなったため、属人的なケアの提供はより難しくなった。本グループでは、新型コロナウィルス感染が問題になる前に開催した多職種でのソーシャルワークチーム養成ワークショップにより、社会的課題を抱えた妊婦をスクリーニングしスコア化し、多職種・他部署での情報共有と連携する仕組みづくりに組織として取り組むことに成功していたため、感情疲弊はむしろ減る方向となった。コロナ禍で人手が手薄になるなか、属人的ではないケアの仕組みの重要性を再確認することになった。

［性暴力被害者支援医療マニュアル G]

改正刑法や司法面接の知見も盛り込んだ日本で初の対応マニュアルの作成が終わったところでコロナ禍により、その普及の研修会が出来なくなった。よりトラウマに配慮した急性期対応を普及すべく半年の研究延長の中で性暴力医療支援分野におけるトラウマインフォームドな対応普及を目指す。

［病院 TIC 実践：兵庫 G]

ヨーガ、アート、音楽のトラウマインフォームドケアプログラムを実施し、医療現場でのトラウマ体験をもつ患者とその家族、対応した医療従事者の心理・生活面に配慮した医療を提供しようとした。コロナ禍に入り、コロナで隔離された患者等にも対象が広がり、方法もオンラインを通じて行うようにもなったことで、トラウマインフォームドな実践の方策拡大に寄与しようとした。

4) トラウマインフォームドな視点の共有

[トラウマインフォームド（TIC）研修 G]

全グループ研究の土台となる技術の開発・普及を目指し、海外専門家招聘によりトラウマインフォームドな知見を研修にて共有し、日本語オリジナルのリーフレット作成や、それをも

とにした研修会・シンポジウムを行うことでトラウマインフォームドな視点の共有を目指そうとした。コロナ禍により、対面シンポジウムがオンラインシンポジウムになる等の変化はあったが、その効果検証には大きな支障はなかった。

２．研究開発の実施内容

２－１．実施項目およびその全体像

実施項目：

公私をつなぐバーチャル・ワンストップ支援センター　グループ（田口奈緒）

①－1. 「バーチャル・ワンストップ支援センター」広報カードの作成

①－2. 地域実践としての市民講座

①－3. 連携強化会議

①－4. 産科DV調査・発表

①－5. メール相談実施と事例検討会

①－6. メール相談のユーザー評価

①－7. ワンストップ支援センター全国調査（インタビュー）

①－8. バーチャルシステム開発

潜在的な子ども被害・学校対応　グループ（毎原敏郎）

②－1.　教職員に対し、気になる子どもに適切に対応できるための研修及び効果検証

②－2.　定期的な学校へのアウトリーチ相談活動を通してTICの概念の普及をはかる

教職員の対応研修　グループ（田口奈緒）

③－1.　研修会の実施

③－2.　ICTを活用した周知

③－3.　被害児童からの安全な聞き取りについてのワークショップ

③－4.　学校における性被害対応ガイドライン作成

SDoH地域資源連携　グループ（周藤由美子）

④－1.　地域資源連結会議の開催、HP の検討、学会での連携の課題の検討

病院のソーシャルワーク機能拡充　グループ（病院TIC実践：京都グループ、病院のSW機能拡充G）（中山健夫）

⑤－1.　社会的孤立女性に対する病院ソーシャルワークの実態調査

⑤－2.　トラウマインフォームド・ソーシャルワークチーム養成講座カリキュラム設定

病院TIC実践：京都グループ（矢野阿寿加）

⑤－3.　トラウマインフォームド-ソーシャルワークチーム養成講座実施、実践、検証

性暴力被害者支援医療マニュアル　グループ（主田英之）

⑥－1.　性暴力被害者支援医療マニュアルの作成を行う。

⑥－2.　性暴力被害者支援医療マニュアルの配布、啓発・広報（研修）

病院TIC実践：兵庫グループ（田口奈緒）

⑦－1．TICプログラム（ヨーガ、アート）の効果検証

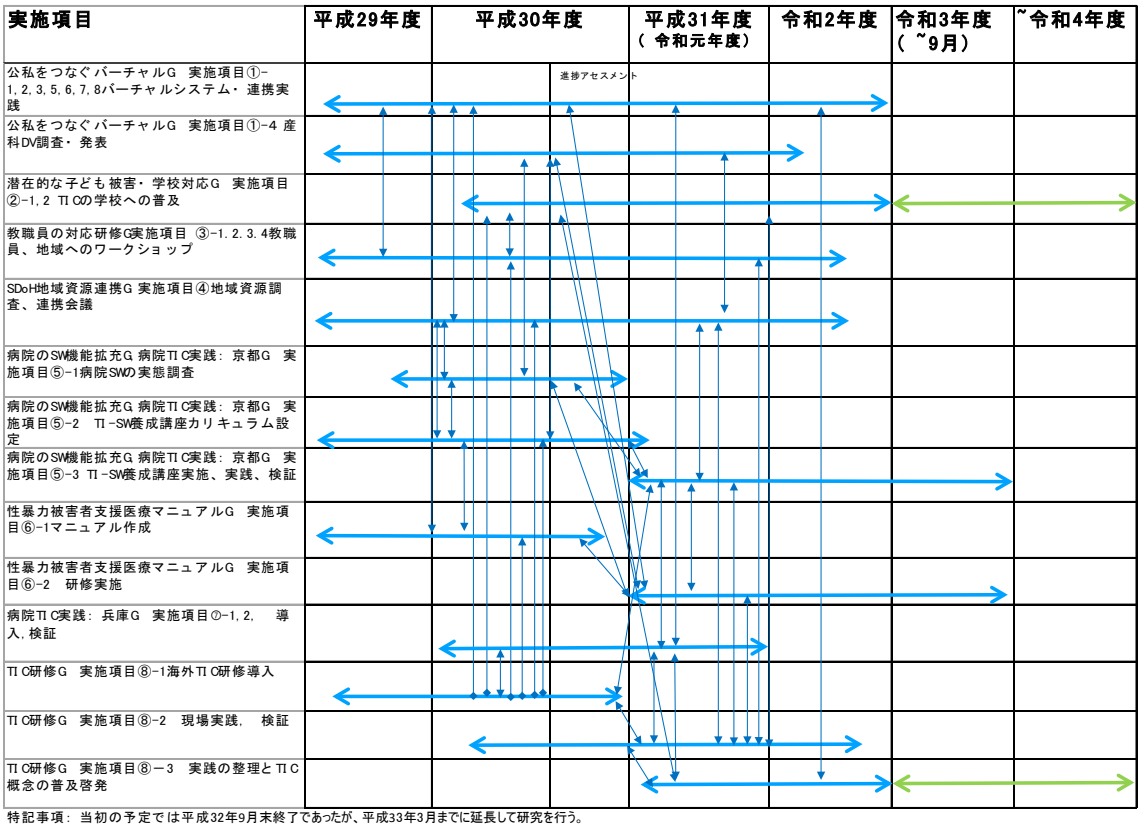
⑦－2．地域におけるTICプログラムの検討

トラウマインフォームド（TIC）研修　グループ（大岡由佳）

⑧－1．エビデンスに基づくTIC研修の本邦への導入とその効果検証

⑧－2．TIC の現場実践・検証

⑧－3．本邦における TIC 実践の整理と TIC 概念の普及方法を確立する



２－２．実施内容

1)バーチャル（WEB）実践

●公私をつなぐバーチャル・ワンストップ支援センター　グループ（田口奈緒）

【実施項目①-1~3、4~8. 】

(1) 目的：

性暴力被害に至っては、ワンストップ支援センターが全国各地に設置（都道府県に約1ヶ所）されていっているものの、どのような支援（サービス）が提供できれば「ワンストップ支援センター」であるのかの定義は統一されておらず、既存の犯罪被害者支援センターやDVセンターが業務内容を拡大して行っている地域も見受けられる。実際には専門性の高

い支援を長期的に1ヶ所で受けることは難しく、たとえば、被害直後に医療機関で急性期の対応は行えても、病院で継続的に法律相談やカウンセリングを受けることは難しいという状況が生じている。平成29年9月に性暴力救援センター全国連絡会で報告された登録団体活動調査によると、地域特性と支援内容は極めて多様であり初期のワンストップ機能と継続的な被害者支援をどう組み合わせるかが課題として挙げられた。もともと性暴力被害者支援は、フェミニズムやエンパワメントの流れを汲む中で育まれてきたものであるが、肝心のジェンダーの視点が抜け落ちていたり、各地で取り組まれてきた支援のノウハウ・知見が十分に生かされていない、関係機関の連携・共有がなされていないといった現状がある。このように法律や支援のタテ割りを超えて、被害者を中心とした支援のフレームへと組みなおしていく必要がある。＜公＞空間から＜私＞空間につながるアクセシビリティをWEB上で保証していくことで、相談／申告することを躊躇う潜在的被害者が、スマホ等のパーソナルな空間から自分で必要な情報を検索・選択し、適切な機関に相談につながる意思決定を行えるようにしていくことを目指す。また、過疎地や離島においても同じように適切な支援につながるよう情報の地域格差をなくす。「公」と「公」の相談機関の“間”ならびに、「公」と「私」の“間”を埋める役割を担えるような性暴力被害の包括的支援システムの開発を目指すことが、本プロジェクトにおけるWEB実践の挑戦である。

(2) 内容・方法・活動：

平成28年度内閣府モデル事業後、所管不明になっていたウェブによる性暴力被害者支援システム「バーチャルワンストップ支援センター」を整備し、本プロジェクト成果を公開できるプラットフォームとした。性暴力被害者に関わる支援機関ネットワークを形成するために連携強化会議を開催し、支援者リストをウェブにアップした。また「バーチャルワンストップ支援センター」内にメール相談の場を設け、相談者のアクセシビリティを改善した。ウェブの周知とともに地域資源の掘り起こしを目的に、市民講座を都市部でなく郡部で開催した。全国の性暴力被害者ワンストップ支援センターの共通部分と相違点を調査するためインタビュー調査を行い、先進的な取り組みを行っているオーストラリアメルボルンにあるMDC (Multi-disciplinary center) を視察した。

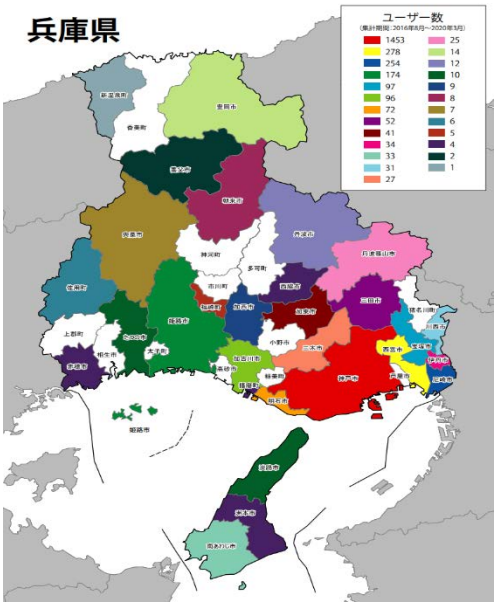


図 1.バーチャルワンストップ支援センターの利用状況

(3)結果：

①「バーチャルワンストップ支援センター」年間アクセス数は2017年度1166回、2018年度3481回、2019年度2929回、アクセス環境としてはモバ

イル53%、パソコン41%、タブレット4%となっていた。全国95市町村、兵庫県内16市からアクセスされていた（2018年度）。若年の性被害が多く、情報が少ないことから、子ども向けのページ「ぷち」を増補した。

②市民講座（「地域における性教育～子どもへの性被害の現状をふまえて」2018年12月2日姫路市（県西部）40人参加　2019年4月13日豊岡市（県北部）45人参加　仲プロジェクトと協働）

③連携強化会議（2018年5月10日　27機関参加　2020年2月12日　19機関参加）いずれも兵庫県警において開催し、許諾を得られた機関をウェブに掲載した。

表 1 連携強化会議 参加機関・団体

ICTによる性暴力被害者支援ネットワーク構築会議参加機関・団体（敬称略）
令和２年２月 12 日（水）

	機関・団体名
1	神戸地方検察庁
2	神戸保護観察所
3	兵庫県弁護士会　犯罪被害者支援委員会
4	(公財)兵庫県こころのケアセンター
5	(公社)ひょうご被害者支援センター
6	日本司法支援センター兵庫地方事務所
7	兵庫県企画県民部県民生活局地域安全課
8	兵庫県企画県民部 女性青少年局 男女家庭課
9	兵庫県警察本部警務課被害者支援室
10	神戸市危機管理室地域安全推進担当課
11	神戸市こども家庭局こども企画育成部こども家庭支援課
12	兵庫県医療ソーシャルワーカー協会
13	(公社)兵庫県看護協会
14	特定非営利活動法人　フェミニストカウンセリング神戸
15	兵庫県臨床心理士会
16	西宮市男女共同参画課
17	兵庫県産科婦人科学会
18	特定非営利活動法人 性暴力被害者支援センター・ひょうご
19	兵庫県立尼崎総合医療センター

ICTによる性暴力被害者支援ネットワーク構築会議参加機関・団体
平成30年5月10日

	機関・団体名
1	神戸地方検察庁
2	神戸保護観察所
3	兵庫県弁護士会
4	(公財)兵庫県こころのケアセンター
5	(公社)ひょうご被害者支援センター
6	日本司法支援センター兵庫地方事務所
7	兵庫県産科婦人科学会
8	兵庫県企画県民部県民生活局地域安全課
9	兵庫県健康福祉部 少子高齢局 児童課
10	兵庫県企画県民部 女性青少年局 男女家庭課
11	兵庫県女性家庭センター
12	神戸市危機管理室地域安全推進担当課
13	神戸市参画推進部男女活躍勤労課
14	神戸市こども家庭局こども企画育成部こども家庭支援課
15	兵庫県医療ソーシャルワーカー協会
16	日本赤十字社神戸赤十字病院
17	(公社)兵庫県看護協会
18	(一社)兵庫県精神保健福祉士協会
19	(一社)兵庫県社会福祉士協会
20	特定非営利活動法人　フェミニストカウンセリング神戸
21	W・S　ひょうご
22	兵庫県警察本部警務課被害者支援室
23	特定非営利活動法人 性暴力被害者支援センター・ひょうご
24	兵庫県立尼崎総合医療センター

④全国ワンストップ支援センターインタビュー調査（21都道府県、24施設）富山県と福岡県からは「バーチャルワンストップ支援センター」活用に関してヒアリングを受けた。結果は女性医学学会、フェミニストカウンセリング学会で発表した。

⑤メルボルン視察（2018年5月）：MDC（アドボカシーセンター、警察、法医学者が同じ建物内で被害者の早期支援を行っている）、アドボカシーセンターのSECASA（South Eastern Center Against Sexual Assault and family violence）を視察し、ウェブでの匿名通告システムを学んだ。

⑥メール相談：2017年度17件（6ヶ月）、2018年

表 2 ワンストップ支援センターインタビュー調査先（一覧）

インタビュー先一覧(21 都道府県 24 ヶ所)

名称	開設年	施設特性
性暴力救援センター・さが　さがmirai	2012	病院拠点型
性暴力被害者支援センター北海道(SACHACH)	2012	連携型
特定非営利活動法人性暴力救援センター・東京(SARC 東京)	2012	病院拠点型
特定非営利活動法人性暴力被害者支援センター・ひょうご	2013	病院拠点型
性暴力救援センター和歌山わかやま mine(マイン)	2013	病院拠点型
性暴力被害者支援センター・ふくおか	2013	連携型
性暴力被害者総合ケアワンストップびわ湖　SATOCO	2014	病院拠点型
一般社団法人しまね性暴力被害者支援センターさひめ	2014	病院拠点型
性暴力救済センター・ふくい「ひなぎく」	2014	病院拠点型
特定非営利活動法人千葉性暴力被害者支援センターちさと	2014	病院拠点型
京都性暴力被害者ワンストップ相談支援センターSARA	2015	連携型
久留米市男女平等推進センター	2015	連携型
みえ性暴力被害者支援センターよりこ	2015	連携型
性暴力被害者支援センター「たんぽぽ」	2015	連携型
とちぎ性暴力被害者サポートセンター「とちエール」	2015	病院拠点型
沖縄県性暴力被害者ワンストップセンター　with you おきなわ	2015	連携型→2019 年病院拠点型
性暴力被害者サポートセンターこうち CORAL CALL	2016	連携型
性暴力救援センター日赤なごやなごみ	2016	病院拠点型
性被害ケアセンターよりそい	2017	連携型
性暴力被害者支援センターとっとり　クローバーとっとり	2017	連携型
あおもり性暴力被害者支援センター	2017	連携型
性暴力被害者支援センター　オリーブかがわ	2017	連携型
性暴力被害ワンストップ支援センターとやま	2018	連携型
静岡県性暴力被害者支援センターＳＯＲＡ	2018	連携型

度57件、2019年度46件　2020年度42件（6ヶ月）そのうち年3名程度電話相談へとつながっている。電話相談と比較し本人からの相談が69.2～92.3%と多いことが特徴である。また平日よりも夜間休日が多かった（夜間休日相談率：2017年64.7%、2018年75.4%　2019年78.3%　2020年76.2%）。メールは文字だけのコミュニケーションとなるため、臨床心理士をスーパーバイズとして年2回の事例検討を行った。メール相談の広報として子ども向けメール相談カードを2000枚配布、好評につき5000枚、さらに追加で5000枚増刷配布した。

(4)特記事項：なし

2)地域実践

●潜在的な子ども被害・学校対応　グループ（毎原敏郎）

【実施項目　②-1～2】

(1)目的：

コミュニティ（A 市）の中で、子どもの傷つき（トラウマ）を有した、気になる潜在的な子どもの発見につなげるための、学校 TIC の海外の知見ももとに、多面的な研修を行い、その効果検証を行う。定期的な学校へのアウトリーチ相談活動を通して TIC の概念を普及する。

(2)内容・方法・活動：

TIC 実践の学校の工夫等をマサチューセッツ州の小学校(2 校)を視察にいき、そのノウハウを日本に持ち帰り、研修会等に生かしてきた。現場のニーズがあった性被害性加害の対応に向けて、A 市の小中高校の教諭（生徒指導担当）全体に向けた研修会を実施した。領域からの提案で友田 PJ と協働の研究発表会等を実施する中で、子どものマルトリートメントやトラウマについて関連を検討した。現場教員（小学校・中学校・高校）に加え、小児科医、精神科医、弁護士の協力を得て、バイオサイコソーシャルな視点から TIC 研修を行った。モデル校において、管理職とともに更なる TIC 概念の普及について検討を重ねたが、新型コロナウイスルの影響により、途中で対面による検討が出来なくなった。

(3) 結果：

2019年度に、A市の小中高校の教諭（生徒指導担当）全体に向けた研修会を実施した。大阪教育大学の実施者の全面的な協力を得て、TIC研修内容の検討を行った。研修実施によるその効果検証をTIC研修の前後で行ったところ、性被害・性加害の子どもや保護者への対応ができる効力感が1.5倍～2.24倍に増し、トラウマについての認識（トラウマの経験率／種類／脳・身体への反応／影響）も、有意に向上した。その結果については、論文に掲載された。

また、確実にTICがモデル校には広がっていることが明らかになった。過去3か年にわたりTIC研究実践を行った結果は、論文掲載に至った。

(4)特記事項：

定期的なアウトリーチ相談活動は、TIC概念普及に結び付くものであるため、「研究開発

成果の定着に向けた支援制度」の中で、更なるTIC実践を行う予定である。

●教職員の対応研修　グループ（田口奈緒）

【実施項目　③－1~4. 】

(1)目的：

写真１　性暴力対応の研修会（風景）

性教育が適切に行われていない本邦では、幼少期から性に関して恥の意識をもたされてしまい、性へのタブー意識が強く、性暴力被害に遭ったとき援助を希求しにくい状況にある。とくに子どもの場合、起きたことを語るには困難が伴う。周囲の大人も平常心が揺らぎ、子どもの気持ちや意思を飛び越え、二次被害を与えがちである。学校では、見守る大人が多いにもかかわらず、性暴力被害・加害を早期発見できなかったり不適切な対応をしてしまったりして、子どもの心を深く傷つけてしまうことも多い。

初期対応がその後の回復を決めるといわれるのが性暴力被害対応である。本プロジェクトの目的は、教育現場をはじめ子どもにかかわる大人に性暴力被害・加害の知見と適切な対応を周知することと、多機関が連携して子どもたちを守っていく方策の確立(ガイドライン作成)である。

(2)内容・方法・活動：

性暴力被害の早期発見・早期対応をテーマに、学校、養護施設などでの研修を実施する。「学校で性暴力被害がおこったら　被害・加害児童生徒が同じ学校に在籍している場合の危機対応手引き」(以下「危機対応手引き」)作成および関係機関へ周知をおこなう。

(3)結果：

①「子どもに関わる身近な大人に被害が相談されたときの適切な対応を学ぶ研修」土台作りのためのワークショップの成果をもとに、児童養護施設、公民館、中学校区の保育園、幼稚園、小学校、中学校の教員を対象に研修を実施した。

②地域における性教育の「一般目標：親を含む大人が、性的な被害から子どもを守るために、子どもの性被害の現状や特性を理解し、早期発見と適切な対応を身につける」および「行動目標」をまとめ、頒布用にクリアファイルを作成した(500部)。

③ガイドライン改め「危機対応手引き」の完成と配布

えんたく会議(2019年9月6日)の参加者の中から執筆メンバーを選定し、4回のワーキングで内容を検討した。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、校正作業が遅れ、「危機対応手引き」発行とWEB(バーチャルワンストップ支援センター)へのデータアップは2020年6月となった。県内だけでなく47都道府県のワンストップ支援センター、内閣府、文科省など配布した。(2500部)

(4) 特記事項：

特になし

●SDoH地域資源連携　グループ（周藤由美子）

●病院のソーシャルワーク機能拡充　グループ（病院のSW機能拡充G）（中山健夫）

【実施項目　④－1.】

(1)目的：

虐待や貧困、DVや性暴力などのトラウマによって「困っている」けれど、「助けて」の声を上げられない「困った」患者さんを、医療の現場から地域の相談支援機関につなぐことができるシステムを構築し、医療現場と地域の相談支援機関とのネットワークづくりを行う。

(2)内容・方法・活動：

行政や民間を含め様々な関係機関が支援に関して連携を広げるために、トラウマインフォームドケア（TIC）の視点の導入が有効であることを関連の学会等で提起した。

虐待や貧困、依存症、障害や外国籍など社会的困難を抱えた女性患者を医療機関から地域の相談支援機関につなぐシステムを構築するために、医療現場でのソーシャルワーク支援ツールKYOTO SCOPEを構築した。

医療従事者が困難を抱えた患者に対峙するときのケアのポイントとともに、必要な支援機関を探し、患者をつなげる際の留意点も理解できる社会資源リストを作成した。モデルケースを取り上げて多職種で話し合うオンライン・ケース勉強会をシリーズ開催し、医療従事者と相談支援機関との顔の見えるネットワークをつくった。

図２　Webサイト KYOTO SCOPE

(3)結果：

Webサイト KYOTO SCOPEを2020年6月にオープンした。オンラインケースカンファレンスなどで周知をすすめ、開設以来のアクセス数は23464件となっている。

医療従事者がこれまでの教育訓練の中で触れることの少なかったDVや性暴力、依存症の当事者の支援における留意点や支援の情報、行政だけでなく民間の相談支援機関も含めた多様な相談支援機関をリストアップするなど医療従事者が患者を地域の社会資源につなげる際に有効なツールとなった。KYOTO SCOPEのモデルケースを使った多職種の（オンライン）ケース勉強会は計9回開催、のべ220名の参加者を得ている。このカンファレンスを通じて、地域において医療機関と相談支援機関の連携が促進され、さらにWebコンテンツが充実している他、地域間での相談支援の実践のノウハウやアイディアが情報交換されるなど効果が上がっている。また、他地域への展開について複数の問い合わせがある。

(4)特記事項：

特になし

3)医療実践

●病院のソーシャルワーク機能拡充　グループ（病院のSW機能拡充G）（中山健夫）

●病院TIC実践：京都グループ（矢野阿寿加）

【実施項目　⑤-1.2.3】

（1）目的：

困りごとを抱えているのに「助けて」の声をあげられない女性に対し、病院職員がトラウマインフォームドな視点をもって適時適切なケアが提供できるようにする改革ツールを開発する。

（2）内容・方法・活動：

社会的孤立女性に対する効果的なソーシャルワークを実施している全国 20 の医療機関職員にインタビューを行い、病院職員のトラウマインフォームドな視点や、院内／院外との顔の見える連携が鍵であるとの分析結果を得た。また洛和会音羽病院全職員へのアンケートや、各職種へのヒアリングを経て、急性期病院の職員は職種を問わず社会的孤立患者と遭遇していること、属人的なケアのみでは感情的疲弊を産むことなどを分析した。これらをもとに 6 時間の多職種ワークショップを設計、実施し、介入に依る変化を観察した。

（3）結果：

12 名の多職種による計 6 時間のワークショップを実施した。ワークショップではトラウマインフォームドな視点を共有の上、社会的孤立女性へのチーム医療として様々なアクションプランを発案し、重要度や緊急度をもとに順位付けした。さらに、企画案を院内のプロジェクトチームに諮り、優先度一位の企画「全妊婦への社会的困難妊婦のスクリーニングとカルテ上の情報共有スペースの作成」が実現した。スクリーニング結果や支援の経過を電子カルテ上で供覧できるようになったことで、外来と病棟、救急と産科と小児科の連携が活性化され、妊娠中から育児期までの継続支援に関する個々の自己効力感が増し、心的負担が軽減した。

表 3　多職種ワークショップ実施内容

	所要時間	内容	結果
1日目	0:30	【レクチャー１】TIC総論	
	0:40	【グループワーク１】困難患者ロールプレイ	医師：困難患者との不要不急なコミュニケーションを避ける 看護師：対応のマニュアル化を希望 MSW：患者とのコミュニケーション手法に注目
	0:30	【レクチャー２】TIC各論（児童虐待・DV・性暴力）	
	0:10	【レクチャー3】ナレッジマネジメント	
	0:15	【グループワーク2】困難患者対応経験を共有	困難患者の世代間連鎖・医療者の疲弊 丁寧な傾聴の継続による成功例・事前の情報収集の重要性
	1:00	【グループワーク3】ペイシェントジャーニーマップ作成	図１
2日目	0:30	【全体ワーク４】課題の明確化	長期目標：「困った人がきたとき、患者さんもスタッフも困らない―ノウハウの標準化と全体周知―」
	0:50	【グループワーク５】企画案作成＋投票	第1位：　困難事例対応テンプレート 第2位：　トラウマインフォームドケア　院内全体研修 第３位：　困難事例対応チームカンファレンス

（4）特記事項

新型コロナウィルス感染拡大防止の観点から、調査研究の一部は対面インタビューから zoom インタビューなどに変更した。ワークショップ構築の下地となった全国のソーシャル

ワークチームへのインタビュー調査、ワークショップ開催前に行った全職員に対する社会的孤立者への意識アンケート結果、ならびにワークショップ介入後の病院機能の変化に関して、現在国際学会発表予定ならびに英語論文投稿中である。

●性暴力被害者支援医療マニュアル　グループ（主田英之）

【実施項目　⑥－1,2】

(1) 目的：

性暴力被害者支援は各医療機関が技術や共有理解がない中で対応に当たっており、大変な二次被害が生じている。よりトラウマインフォームドな対応を医療現場にしてもらうべく、その手引きの作成を行う。

(2) 内容・方法・活動：

それぞれのニーズに応じた機能別の性暴力被害者支援医療マニュアルを作成するべく、警察等の関係者と性暴力被害者支援医療マニュアルの作成を行い、印刷・配布、啓発・広報を行っていく。

(3) 結果：

性犯罪被害者の対応が必要な“医師・医療機関向け”版と、性暴力被害者に対応できる“関係各医会の代表者の意見を取り入れた医療機関向け”版のマニュアルの作成に取り組んだ。

(4) 特記事項：

新型コロナウィルス感染拡大防止の観点から、マニュアル研修開催が行えず、半年間の研究開発延長が認められた。延長期間においても、新型コロナの影響があったが、第8回日本フォレンジック看護学会学術集会（令和3年8月28-29日大阪、オンライン）において、マニュアル作成の成果について一般演題として発表を行った。

●病院TIC実践：兵庫グループ（田口奈緒）

【実施項目①-4　および、⑦-1~2】

(1) 目的：

従来トラウマのケアの中心は、トラウマを有した方の“治療”に焦点が置かれてきた。しかしたとえばパートナーからの暴力（DV）を受けた当事者は、すぐに相談機関につながる者は少なく、様々な心身の不調や不適応、問題行動を呈して、それらの表層的な問題の対処としてカウンセリングや医療機関等を訪れ治療の対象になる。また急性期医療を担う三次救急病院では、事故や疾病のためにいまだ心理的トラウマのさなかにあり、メンタルサポートを得ることすら思いつかないかもしれない。医療現場でのトラウマ体験をもつ患者とその家族、対応した医療従事者が、安全にトラウマ体験を表出できることで心理・生活面に配慮した医療が提供でき、病院に対する信頼感が醸成されることを目的とする。

(2) 内容・方法・活動：

TIC プログラム「Painting Story（あなたのストーリーを描きましょう）」とは医療機関においてトラウマを抱えた人々（患者、家族、医療スタッフ）に対しトラウマを表出しやすい環境を創出する試みである。アートやヨーガ、音楽のファシリテータが患者個別に、体調に配慮しながら 30 分から 1 時間程度のプログラムを 3〜6 回行った。トラウマインフォームドケア理念を病院幹部や管理職に理解してもらうために、オーストラリアよりアートとトラウマヒーリングを実践するオイゲン・コウ博士にプログラムのスーパーバイズを依頼し、ワークショップを実施しながらガイドライン作成や対象者への個人情報保護の整備、病院コミュニテイへの導入について検討した。
さらにプログラムを地域で継続するためにトラウマアートの先駆的な試みを実践しているメルボルンのダックスセンターを視察（2019 年 5 月）し、アートの教育的効果や評価指標について示唆を得た。
総合周産期母子医療センターである県立尼崎総合医療センターにおいて、周産期の DV スクリーニング調査を行った。DV 被害者支援には子ども虐待のような包括的支援システムがなく、医療、行政、民間団体との 2 回のワークショップで妊娠中からのサポートをイラスト化した「マタニテイマップ」を作成し、妊娠中の社会的・心理的サポートについて情報提供した。京都チームの社会的孤立女性サポートやソーシャルワーカー養成とも協働で行った。

（3）結果：

産科入院患者を中心にがん患者会、更年期教室参加者、医療スタッフ向けにのべ 350 名（2018 年 6 月〜2020 年 9 月）にプログラムを実施した。（表）

表 4　TIC プログラム参加者

これまでの参加者

	患者様 個人 のべ人数(実人数)	患者様 グループ のべ人数(回数)	医療スタッフ グループ のべ人数(回数)	総 のべ人数
アート	102 人(43 人)	60 人(24 回)	28 人(4 回)	190 人
ヨーガ	107 人(45 人)	24 人(4 回)	5 人(1 回)	136 人
音楽	8 人(5 人)	16 人(1 回)	0 人(0 回)	24 人

尼崎総合医療センターにおける DV 調査の結果、入院している妊婦の 36.3%がパートナーからの暴力を受けている可能性があることが明らかになった。研修会、ワークショップを行い、TIC をアートやヨーガにより表現する方法を模索した。

（4）特記事項：

2020 年 4 月以降新型コロナウイルス感染拡大により院内での患者面会が禁止になった。そこでオンライン（ZOOM）でプログラムを継続し、COVID-19 感染症隔離患者に対してもヨーガおよびアートを行った。

4）トラウマインフォームドな視点の共有

●トラウマインフォームド（TIC）研修　グループ（大岡由佳）

【実施項目：⑧－1~3】

(1) 目的：

トラウマインフォームドケアの概念については、現在、本邦において知られるようになってきているが、本 PJ が走り出した頃は、TIC について知る者は多くはなかった。その TIC の概念を、PJ 全体で共有し、対人援助職に向けて普及していく土台をつくることを本グループの目的とした。また、TIC 概念を広く社会で共有すべく、市民に伝えていくツールも検討した。

(2) 内容・方法・活動：

海外（ジョージタウン大学が開発した TI-MED の TIC 研修パッケージ）の知見を踏まえ、日本の文化特性を踏まえた日本語版の TIC 概念の整理を行った。その上で、医師(小児科・精神科・産婦人科・法医学)、ソーシャルワーカー、教育関係者、弁護士、民間支援機関等、多領域多職種の関係者でワーキングチームを発足し、TIC パンフレットを作成した。また、TIC 概念を社会に広く共有すべく、海外の TIC 実践で取り組まれることのあるアートを媒体にトラウマを市民に理解してもらう取り組みに着手した。

写真 2　トラウマ展のチラシ

(3) 結果：

領域横断的な大規模な TIC に絡むシンポジウムを開催し、人々のトラウマの影響や対処の理解を普及する予定であったが、2019 年度は新型コロナウィルス感染症の影響につき延期となった。2021 年にオンライン開催を行い、TIC パンフレットの普及に努めた。TIC 概念の社会に広く共有する仕組みとしてアートを用いた表現アピール『トラウマ展―見てないことへの寄り道』を開催した。アートを通してトラウマを市民に伝えることで、市民のトラウマの認識度は有意に向上した（n=807、p<0.001　t 検定）

写真 3　オンライン開催シンポジウムの様子

(4) 特記事項：

対人援助職や市民に TIC の概念を定着すべく「研究開発成果の定着に向けた支援制度」に引き継がれ研究定着を行うことになった。

３．研究開発成果

３－１．目標の達成状況

トラウマインフォームドなケア（TIC）を基盤の発想とし、地域の社会的資源の有機的な

連携や、トラウマに感度の高い専門職養成を進めると同時に、「私」空間からもアクセスが容易なインターネットを活用することで、彼・彼女らに適時適切に対応できる＜公＞と＜私＞をつなぐケアシステムの構築を目標としてきた。

TIC を基盤の発想にそれぞれの現場で有機的連携や専門職の TIC 視点の共有を図ることは、地域は限られるものの、達成できたと考える。また、 バーチャルワンストップ支援センターの WEB 実践をはじめ、KYOTO SCOPE といった、＜公＞と＜私＞をつなぐ当事者・支援者のケアシステム構築も全国普及のモデルとして行うことが出来た。

なお、本 PJ では、「潜在的な子ども被害・学校対応　グループ（毎原敏郎）」「トラウマインフォームド（TIC）研修　グループ（大岡由佳）」が「研究開発成果の定着に向けた支援制度」に引き継ぎ全国展開を目指すことになった。また、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う研究開発遅延により、「病院のソーシャルワーク機能拡充　グループ（病院の SW 機能拡充 G）（中山健夫）」「性暴力被害者支援医療マニュアル　グループ（主田英之）」は、2021 年 9 月までの研究延長機関の指定を受けた。

３－２．研究開発成果

成果１　当事者が支援につながりやすい仕組みの提案

（1）内容：(公私をつなぐバーチャル G）の実践により、ワンストップ支援センター調査により性暴力被害者支援の現状把握および包括的行政関与の必要性を提言できた。メール相談の実施により、ネット空間から現実世界の支援につなげるノウハウ蓄積し、当事者がつながりやすく、支援者も支援する負担が減る仕組みを確立できた。

＜受益者・担い手の意見＞

・メール相談は返信を複数の支援員で考えることが可能で心理的負担が少なく、また条件が合えば相談者を電話や面談につなげることができた。新型コロナウイルス感染症拡大で子どもや女性への家庭内での性暴力が深刻化するなか、スマホなどで SOS を出すきっかけになる可能性がある。(NPO 法人性暴力被害者支援センター)

・刑事事件として扱うことが難しいと考えられる事例、恋人が被害に遭った男性からの相談、夜間に不安で眠れなくて送信されたメール、「この相談先がなかったら自殺していた　でも電話する勇気はない」という女性など。(性暴力被害相談者)

（2）活用・展開：バーチャルワンストップ支援センターにはリアル（実際）の関係機関の連携が必要になるため、地域ごとの運用が欠かせない。そのため、各地方公共団体による運用体制・資金の目途が立つ必要がある。各地方自治体で本仕組みに関心をもっているところが複数出ている。

（3）その他：バーチャルワンストップ支援センターの取りくみは行政（内閣府）も注目するところであり、本研究の動きも参考にされた。

成果２　支援者が当事者に TIC 的対応ができる組織の構築

（1）内容：(病院の SW 機能拡充 G）(性暴力被害者支援医療マニュアル G）(病院 TIC 実践：京都 G）(潜在的な子ども被害・学校対応 G）の組織全体を巻き込んで実践することにより、

病院や学校での当事者（児童生徒・患者）の実態解明ができ、トラウマに配慮したケアが組織として可能になった。支援者は、TIC の知見共有によって、適切な対応のヒントが得られたことが確認された。

＜受益者・担い手の意見＞

・これまでは困難を抱えているかもしれない患者に出会ってもどうしていいかわからず正直面倒に思っていたが、これからはつなげる先があるということで、安心して対応できるという楽な気持ちで対応できるようになった。(医療従事者)
これまで経験値の高い個別の助産師のみが社会的困難患者に対応していたが、スクリーニングがなされるようになったことで、経験値の低いスタッフも課題を抽出できるようになった。抽出される課題やその後の対応の質も、以前と比べて遜色なく、より広く標準化したケアを提供できるようになった。(産婦人科医師)
・「社会的課題のアセスメントシートが電子カルテ内にあることで、社会的に課題を抱えた患者さんに関して、他部署・他科との連携が活性化した。仕事は増えたかもしれないが、気持ちは随分楽になった。」(病院外来スタッフ)
・TIC を学ぶまでは、生徒・保護者との対応上の問題についてただただ困難感を感じていたが、TIC を学んでからは、「ん？」「何か気になる」「なんでだろ？」と考えるようになった。そして、そこからさらに一日歩み寄って生徒・保護者と話をすることで、もっと違う一面が見えてきて、対応解決への糸口が見えてくることもあった。TIC を学んだことで、自分たちの気持ちの持ち方もかわり、困難感というストレスが少し軽減したようにも思う。(教員)

（2）活用・展開：組織変革についてのスタッフらの満足度は高く、組織の変革例として論文や学会報告等で関係者に知らせることで、この取り組みは広く応用展開されていくことが想定される。

（3）その他：数値化はされないものの、スタッフの対応する際の安心感は、多くの児童生徒や患者の安心感に連動しエンパワメントにつながることから、当事者にとっても利得があると考えられる。

成果３　当事者に TIC 的に対応するための多機関連携の方策

(1)内容：(教職員の対応研修 G)、(SDoH 地域資源連携 G）の研究開発により、支援の手引き作成共有や事例検討システムが確立された。その中で、地域社会資源の連携システム (SDoH) 構築や多機関連携が進み、その中で当事者への対応方法の共有、当事者の早期発見・早期対応（二次予防）につながった。

＜受益者・担い手の意見＞

・学校関係者、行政の性暴力被害担当部署の職員などに、この内容をぜひ理解してもらいたいと思い「支援員研修会」で使用し、非常にわかりやすく好評でした。(医師)
・児童虐待の予防のためには、若年の特定妊婦予備軍の女性に対して、早い段階で支援体制を取っていくことが重要であると考えている。民間も含めた支援機関による幅広い情報共有や連携のシステムづくりが有効といえる。(行政の児童虐待対策担当者)

（2）活用・展開：(教職員の対応研修 G）の作成した『危機対応の手引き』は全国から問い合わせがあり、内閣府からもヒアリングを受けている。今後様々な学校等機関の研修等に活用してもらう余地がある。KYOTO SCOPE 構築の中で開催されてきた事例検討会で出来た多機関連携の形は外部機関から大変評価をされ、今後各地域で広がっていく可能性が秘められている。

（3）その他：特になし

成果４　当事者・支援者がトラウマからの癒しにつながる方法論の提案

（1）内容：トラウマインフォームドな実践として、アートや音楽、ヨーガ等の身体に働き

かける方法がトラウマを癒すことが知られている。(病院 TIC 実践：兵庫 G)（トラウマインフォームド（TIC）研修 G）の研究開発では、その直接的なトラウマインフォームドな実践を行った。トラウマ体験をもつ当事者とその家族、対応したスタッフが、トラウマ体験を表出することにより、トラウマからの癒しやメンタルストレスの軽減を実感できた。本邦においては、非常に目新しい取り組みの位置づけとなる。

＜受益者・担い手の意見＞

・毎日毎日が忙しく、ミスを許されない環境のなか、赤ちゃんが亡くなったお母さんに対してもゆっくり気持ちに寄り添うことができず不全感を感じていた。アートやヨーガのような自分と向き合うプログラムは医療スタッフにこそ必要なのではないかと思った。(病院助産師)

・自分で扱いきれない悲しみや苦しみを言葉にすることは難しいけれど、絵にすると素直に表現できたように思う。(当事者：心の表現アートワークショップ参加者)

・描き初めは、先が見えない感じで、すごくつらかったです。しかし、描き進めていく中で、自分の中に、”つらい”気持ちと、”希望”が共存していることに気づきました。言葉にはできない不思議な感覚でした。(当事者：心の表現アートワークショップ参加者)

・コロナで隔離されて誰とも会えないなか、オンラインで身体を動かせたのは良かった。ヨガのあと、とてもすっきりして、自分は結構疲れていたんだと気づいた。(ヨーガプログラム参加者)

（2）活用・展開：非常に有用な取り組みであり、学会等からもこの実践研究は評価をされた。一方、本邦には、トラウマをアート等で癒す仕組みは確立しておらず、効果は認めてもらえても、組織としてその予算取りを行うことは容易ではない。また、アートセラピストといった人材の養成を日本では本格的に行ってこなかったため、その受け皿も少ない現実が明らかになった。

（3）その他：当事者だけではなく、日々摩耗されている支援者にも有効であることは、今後の支援者支援を考える上で重要な知見と考えられた。

成果５　トラウマインフォームドな発想をもつコミュニティにする手がかり発見

（1）内容：(トラウマインフォームド（TIC）研修 G)（教職員の対応研修 G）(SDoH 地域資源連携 G）の研究開発によって、コミュニティで TIC の発想をもつ方法論が確立された。とくに、地域に開かれた研修を行っていくことが、緩やかな TIC 発想をもつコミュニティづくりに寄与することが確認された。そして、そのようなコミュニティづくりは、支援にとっても安心安全ももたらすことが明らかになった。

＜受益者・担い手の意見＞

・犯罪被害者支援に関わる弁護士に、この手引きはとても好評で、多くの弁護士から問い合わせを受けました。(市内の)学校全てに、手引きを置いてもらえることになり(略)今後、学校現場で性被害が起こったとき、この手引きが事案を良い解決に導いてくれると思うと、ほっとします。(弁護士)

・みんなが幾つかのトラウマを持っているという前提とする、という所に、やっときたと、思いました。(TIC シンポジウム参加者・支援団体の関係者)

・様々な立場の先生が、トラウマについて困難さを認めつつも、前向きに対応している姿を見て勇気づけられました。ありがとうございました。(TIC シンポジウム参加者・行政職（保健・福祉))

（2）活用・展開：トラウマインフォームドな発想は、どんどんと本邦で浸透していっており、本 PJ でも、その展開に寄与している。とりわけ、本邦では TIC は子ども分野で語られることの多く、産婦人科等の成人分野におけるトラウマインフォームドな視点の普及は、本 PJ の功績として評価されると考えられる。コミュニティの TIC の知見を知りたいニーズは

高く、本 PJ で 2021 年 1 月に開催した TIC シンポジウムの研修案内希望者は全体の 93%(455 名）に上った。

(3) その他：（トラウマインフォームド（TIC）研修 G）では、トラウマインフォームドな発想をもつコミュニティ構築に寄与すべく、「研究開発成果の定着に向けた支援制度」を受けて研究開発定着を目指す。

４．領域目標達成への貢献等

４－１．領域目標達成への貢献

本プロジェクトの領域目標達成への貢献については、「(A) 発見・介入しづらい空間・関係性における危害や事故の予防と低減に資する新たな手法を現実の問題とニーズに基づいて提示」に対して、バーチャルワンストップ支援センターの WEB 実践が寄与している。バーチャルからリアルへつなぐ方策を確立した。「(B) 発見・介入しづらい空間・関係性における危害や事故の予防と低減に資する制度・政策とその実現可能性を提示」に対しては、TIC の視点の共有することで促進する多機関連携の在り方が役立ったと考えられる。TIC の発想として、皆がトラウマを有しているかもしれないとの発想のもと、TIC の視点はすべての機関・スタッフが持つべき視点とされており、そこに多機関連携への共通理解が生まれている。「（C）社会システムへの統合可能性という観点で、これらの手法を導いた思考・考え方を共有するネットワークを構築」については、TIC の視点を定着させていくオンライン教材事業を「研究開発成果の定着に向けた支援制度」により実施することを予定しており、その基盤を本 PJ で作ったという点でネットワークがある一定程度構築されたといえる。

４－２．プロジェクト共通の課題への貢献

「①個人情報の活用」について、実際の被害者ケースの取り扱いをどのようにすべきか等検討を進めてきた。とくに、行政を巻き込み支援を行う際に、どこまでの情報をどのように共有するかについてそれぞれの現場でノウハウを蓄積してきた。

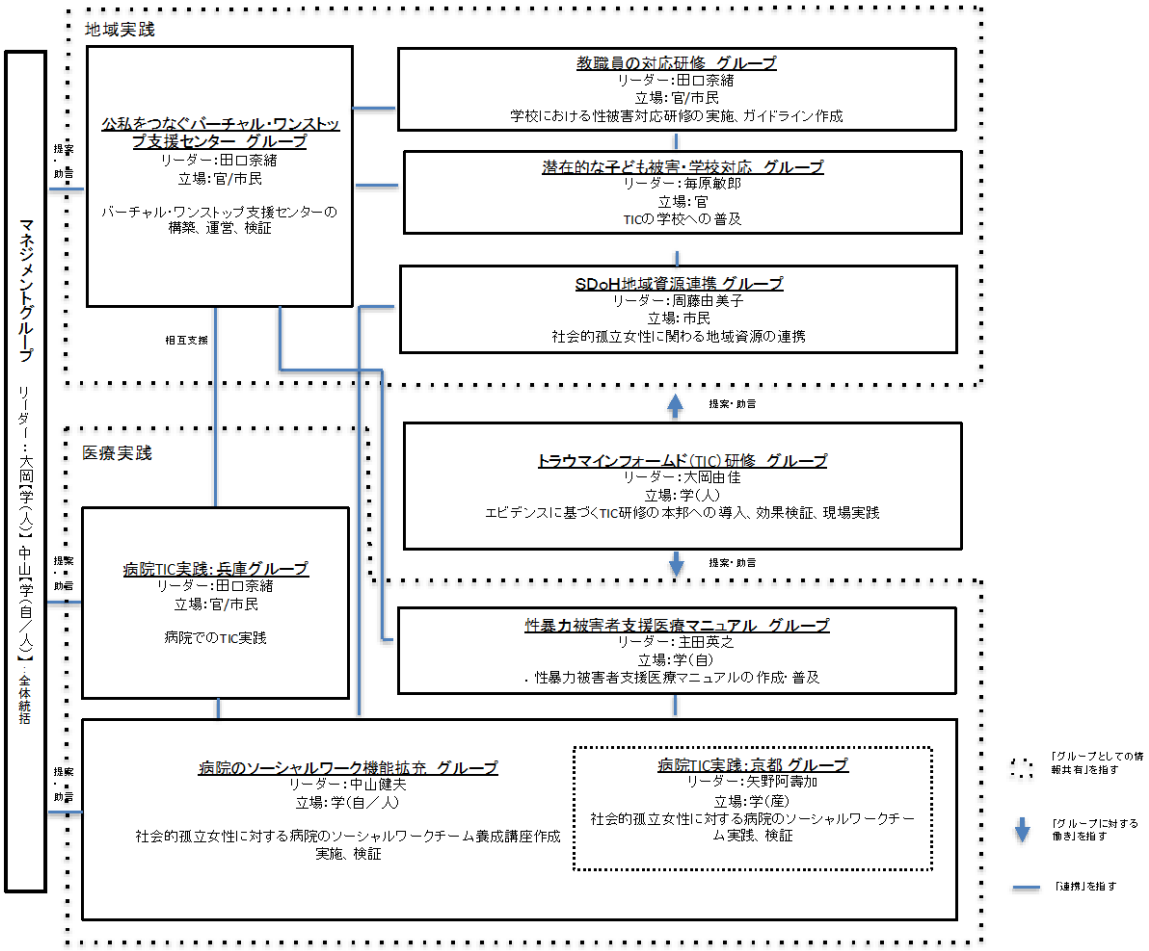
また、「②地域内公／私連携」においては、行政職（教職員を含む）が数年で異動してしまう故に、TIC の実践普及が担当者によって止まってしまうことを経験し、どう引き継いでいくか、また、キーパーソンをどう確保しておくかについて検討をしてきた。

「③人権教育と対人援助職の能力強化」については、TIC の視点自体が、人々の人権をどこまで尊重できるかということにつながっているために、TIC を学べば学ぶほど問題の発見力や対応力を高めることに寄与することを統計的にも明らかにした。

「④成果の普及・展開」については、2021 年度より「研究開発成果の定着に向けた支援制度」により全国普及展開を目指していく。

５．研究開発の実施体制

５－１．研究開発実施体制の構成図



５－２．研究開発実施者

（1）マネジメントグループグループ（リーダー氏名：大岡）

役割：プロジェクト全体を統括する

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
大岡　由佳	オオオカ　ユウカ	武庫川女子大学短期大学部	心理・人間関係学科	准教授
中山　健夫	ナカヤマ　タケオ	京都大学大学院	医学研究科	教授
田口　奈緒	タグチ　ナオ	兵庫県立尼崎総合医療センター	産婦人科	部長

池田　裕美枝	イケダ　ユミエ	京都大学医学部付属病院	産科婦人科	特定研究員

（2）公私をつなぐバーチャル・ワンストップ支援センターグループ　／　病院 TIC 実践：兵庫グループ（リーダー氏名：田口）

役割：WEB による TIC の実践と医療機関の TIC 実践

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
田口　奈緒	タグチ　ナオ	兵庫県立尼崎総合医療センター	産婦人科	部長
井上千秋	イノウエチアキ	いのうえ助産院	院長	助産師
荒木　智子	アラキ　トモコ	畿央大学	ＫＡＧＵＹＡプロジェクト	博士研究員
福岡　ともみ	フクオカ　トモミ	兵庫県立尼崎総合医療センター	産婦人科	事務補助

（3）潜在的な子ども被害・学校対応グループ（リーダー氏名：毎原）

役割：学校 TIC の推進・普及

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
毎原　敏郎	マイハラ　トシロウ	兵庫県立尼崎総合医療センター	小児科	科長
大岡　由佳	オオオカ　ユウカ	武庫川女子大学短期大学部	心理・人間関係学科	准教授
岩切　昌宏	イワキリ　マサヒロ	大阪教育大学	学校危機メンタルサポートセンター	准教授
瀧野　揚三	タキノ　ヨウゾウ	大阪教育大学	学校危機メンタルサポートセンター	教授
中村　有吾	ナカムラ　ユウゴ	徳島大学	保健管理・総合相談センター	助教
浅井　鈴子	アサイ　レイコ	兵庫県立尼崎総合医療センター	小児科	相談員

（4）教職員対応研修グループ（リーダー氏名：田口）

役割：地域（学校）における TIC 実践

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）

福岡　ともみ	フクオカ　トモミ	兵庫県立尼崎総合医療センター	産婦人科	事務補助
田口　奈緒	タグチ　ナオ	兵庫県立尼崎総合医療センター	産婦人科	部長

（5）性暴力被害者支援医療マニュアル作成グループ（リーダー氏名：主田）

役割：医療における TIC 実践

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
主田　英之	ヌシダ　ヒデユキ	徳島大学	法医学分野	准教授
田口　奈緒	タグチ　ナオ	兵庫県立尼崎総合医療センター	産婦人科	部長
福岡　ともみ	フクオカ　トモミ	兵庫県立尼崎総合医療センター	産婦人科	事務補助

（6）トラウマインフォームド（TIC）研修グループ　　（リーダー氏名：大岡）

役割：TIC の視点の普及啓発

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
大岡　由佳	オオオカ　ユウカ	武庫川女子大学短期大学部	心理・人間関係学科	准教授
武藤　惠美	ムトウ　エミ	武庫川女子大学	男女共同参画推進室	研究調整員
大江　美佐里	オオエ　ミサリ	久留米大学医学部	神経精神医学講座	講師
石田　哲也	イシダ　テツヤ	久留米大学医学部	神経精神医学講座	助教
毎原　敏郎	マイハラ　トシロウ	兵庫県立尼崎総合医療センター	小児科	科長
井上　美智子	イノウエ　ミチコ	兵庫県立尼崎総合医療センター	小児科	相談員

（7）病院のソーシャルワーク機能拡充グループ（リーダー氏名：中山）

役割：医療における TIC の普及啓発

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
中山　健夫	ナカヤマ　タケオ	京都大学大学院	医学研究科社会健康医学系健康情報学	教授

池田　裕美枝	イケダ　ユミエ	京都大学大学院	医学研究科社会健康医学系健康情報学	博士課程
中野　慶子	ナカノ　ケイコ	畿央大学	健康科学部看護医療学科	助手
荒木　智子	アラキ　トモコ	大阪行岡医療大学	医療学部理学療法学科	助教
日吉　和子	ヒヨシ　カズコ	園田学園女子大学	人間健康学部人間看護学科	講師
加瀬　早織	カセ　サオリ	京都大学大学院	医学研究科社会健康医学系健康情報学	修士課程
森下真理子	モリシタ　マリコ	京都大学大学院	医学教育・国際化推進センター	博士課程
小西　由紀	コニシ　ユキ	京都大学大学院	医学研究科社会健康医学系健康情報学	研究員

（8）病院 TIC 実践：京都グループ　（リーダー氏名：矢野）

役割：医療における TIC 実践

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
矢野　阿壽加	ヤノ　アスカ	洛和会ヘルスケアシステム	本部	理事
野溝　万吏	ノミゾ　マリ	洛和会音羽病院	産婦人科	医長
伊藤　美幸	イトウ　ミユキ	洛和会音羽病院	産婦人科・腹腔鏡手術センター	センター長
清水　一美	シミズ　ヒトミ	洛和会音羽病院	看護部	２D 助産師
椿　真紀子	ツバキ　マキコ	洛和会音羽病院	看護部	2D 助産師
日下　智美	クサカ　トモミ	洛和会音羽病院	看護部	外来看護師
仙石　美香	センゴク　ミカ	洛和会音羽病院	看護部	外来看護師
佐川　典正	サガワ　ノリマサ	洛和会音羽病院	総合女性医学健康センター	センター長
田中　真友子	タナカ　マユコ	洛和会音羽病院	入退院支援相談室	相談員

伊藤 奈緒美	イトウ　ナオミ	洛和会音羽病院	入退院支援相談室	相談員
西泊　翔太	ニシドマリ　ショウタ	洛和会音羽病院	ジュニアレジデント	ジュニアレジデント
久松　いつみ	ヒサマツ　イツミ	洛和会音羽病院	ジュニアレジデント	ジュニアレジデント
橋本　亮	ハシモト　リョウ	洛和会音羽病院	ジュニアレジデント	ジュニアレジデント

（9）SDoH 地域資源連携グループ（リーダー氏名：周藤）

役割：地域における TIC 実践

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
周藤由美子	ストウユミコ	ウィメンズカウンセリング京都	京都 SARA	スーパーバイザー
川上陽子	カワカミヨウコ	ウィメンズカウンセリング京都	事務局	スタッフ
武森紫織	タケモリシオリ	ウィメンズカウンセリング京都	事務局	スタッフ

５－３．研究開発の協力者

氏　名	フリガナ	所　属	役職（身分）	協力内容
亀岡　智美	カメオカ　トモミ	兵庫県こころのケアセンター	副センター長	専門的助言（児童精神医学）
大塚　淳子	オオツカ　アツコ	帝京平成大学　健康メディカル学部	教授	専門的助言（精神保健福祉）
岸川　洋紀	キシカワ　ヒロキ	武庫川女子大学生活環境学部	講師	専門的助言（統計）
ちょん　せいこ	チョン　セイコ	株式会社　ひとまち	代表取締役	専門的助言（ホワイトボードミーティング）
野坂　祐子	ノサカ　サチコ	大阪大学大学院	准教授	専門的助言（心理）
木村　有里	キムラ　ユリ	大阪教育大学	相談員	専門的助言（心理）
関口　久志	セキグチ　ヒサシ	京都教育大学	教授	専門的助言（ジェンダー）
四井　恵介	ヨツイ　ケイス	(有)地域・研究アシス	代表	調査（病院調査担当）

	ケ	ト事務所		
稲垣　由子	イナガキ　ユウコ	甲南女子大学	教授	専門的助言（虐待関連）
仲　　真紀子	ナカ　マキコ	立命館大学　総合心理学部	教授	専門的助言（虐待対応関連）
大橋　正伸	オオハシ　マサノブ	兵庫県産婦人科学会	会長	産婦人科医療機関への周知
吉田　多加志	ヨシダ　タカシ	兵庫県警捜査一課	警部補	警察内への周知
飯塚　之利	イイヅカ　ユキトシ	兵庫県警被害者支援室	警務課長補佐	警察内への周知
廣瀬　雅哉	ヒロセ　マサヤ	兵庫県立尼崎総合医療センター　産婦人科	科長	DV 被害患者についての専門的助言
青木　唯史	アオキ　タダシ	ページワンスタジオ	取締役　業務部長	WEB 整備
荻野　勝己	オギノ　カツミ	兵庫県西宮こども家庭センター	所長	児童相談所の意見集約
木下　浩昭	キノシタ　ヒロアキ	兵庫県健康福祉部	課長	兵庫県その他関係機関情報集約
錦織　宏	ニシゴリ　ヒロシ	京都大学医学教育・国際 化推進センター	准教授	専門的助言（教育研究）
田村　秀子	タムラ　ヒデコ	京都府産婦人科医会	会長	産婦人科医療機関への周知
松村　理司	マツムラ　タダシ	洛和会ヘルスケアシステム	総長	病院内体制整備、助言
金　湖蓮	キム　ホリョン	NPO 法人性暴力被害者支援センター・ひょうご	事務局	相談員(メール相談、性教育)
上利　博美	アガリ　ヒロミ	大阪地方検察庁再犯防止室	PSW	TIC 研修グループの助言
上山崎　悦代	カミヤマザキ　エツヨ	兵庫医療大学	講師	TIC 研修グループの助言
山田　真紀子	ヤマダ　マキコ	大阪府地域生活定着支援センター	所長	TIC 研修グループの助言

谷田　寿美江	タニダ　スミエ	NPO 法人性暴力被害者支援センター・ひょうご	支援員	病院 TIC グループへの協力
鍋谷　美子	ナベタニ　ヨシコ	NPO 法人性暴力被害者支援センター・ひょうご	支援員	公私をつなぐバーチャルワンストップへの協力
谷山　牧	タニヤマ　マキ	国際医療福祉大学	准教授	TIC 研修グループの助言
川島　大輔	カワシマ　ダイスケ	中京大学心理学部	准教授	専門的助言（心理）
川野　健治	カワノ　ケンジ	立命館大学　総合心理学部	教授	専門的助言（心理）
五十嵐　逸美	イガラシ　イツミ	かにた婦人の村	施設長	TIC 研修グループの助言
渡口　泰子	トグチ　ヤスコ	SHG ドリームファクトリー	代表	TIC 研修グループの助言
上垣　萌衣	ウエガキ　モエ	兵庫県立尼崎総合医療センター	子ども療養支援士	TIC 研修グループの助言
Elizabeth Power	エリザベス　パワー	EPower and Associates , Dept. of Psychiatry Georgetown University	CEO	TIC 研修グループの研修講師
Pamela A. Saunders	パメラ　サンダース	Dept. of Psychiatry Georgetown University	Associate Professor & Program Director	TIC 研修グループの研修講師
Eugen Koh	オイゲン　コウ	St Vincent’s Hospital	superviser	病院 TIC グループの助言
高濱　浩子	タカハマ　ヒロコ		アーティスト	病院 TIC グループの助言
中西　幸	ナカニシ　ミユキ	兵庫県立尼崎総合医療センター	音楽療法士	病院 TIC グループの助言

森本　志磨子	モリモト　シマコ	NPO 法人子どもセンターぬっく	理事長／弁護士	公私をつなぐバーチャルワンストップへの協力
中野　加奈子	ナカノ　カナコ	大谷大学社会学部コミュニティデザイン学科	准教授	専門的助言（病院のソーシャルワーク機能拡充 G）
藤原　武男	フジワラ　タケオ	東京医科歯科大学国際健康推進医学	教授	専門的助言（病院のソーシャルワーク機能 G）、連携（病院 TIC グループ京都）
石井美和子	イシイミワコ	PhysioLink	代表	多職種連携に関するシンポジウム講師
森野佐芳梨	モリノサオリ	慶應義塾大学理工学部システムデザイン工学科	特別研究員	多職種連携に関するシンポジウム講師
池島　良子	イケシマ　ヨシコ	池島通訳翻訳事務所	通訳者	TIC 研修グループの通訳・助言
角野太一	スミノ　タイチ	NPO 法人ハートフル障害者相談支援センター輪っふる	センター長	TIC 研修の運営計画
杉山春	スギヤマ　ハル	ライター		TIC 編集への助言
高木大吾	タカギダイゴ	Pastel Design	クリエイティブデザイナー	専門的助言（病院のソーシャルワーク機能拡充 G、SDoH 地域資源連携 G）
横尾安紀	ヨコオ　アキ	グループホーム CHIAKI ほうずき神戸垂水	介護士	TIC アートへの専門的助言（アートセラピー）

６．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

６－１．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

６―１―１．プロジェクトで主催したイベント（シンポジウム・ワークショップなど）

年月日	名　称	場　所	概要・反響など	参加人数
2017年11月	第9回ひょうご性教	神戸市勤労会館	「子どもに関わる身近	30 名程度

2日	育研究会 教職員対応研修ワークショップ	４０３	な大人が性被害を相談されたときの適切な対応を学ぶ」研修の土台作りを行った。	
2017 年 11 月 25 日	妊産婦ケアを理学療法士と考える Physical Therapy in Obstetrics；PTO	京都大学医学部附属病院臨床第一講堂	近畿・北陸圏の産婦人科医師、助産師、理学療法士などが参加し、妊産婦の不調や痛みに対してチームで取り組む試みを話し合った。	60 名
2018 年 1 月 6 日	大岡ＰＪキックオフ トラウマへの気づきを高める “人-地域-社会”によるケアシステムの構築	尼崎総合医療センター １階講堂	プロジェクトのキックオフとして、ホワイトボードミーティング®[1]の手法を用い、プロジェクトの方向性と目指すものについて確認を行った。	30 名
2018 年 1 月 15 日	妊娠期から虐待・DV を予防する支援システムとは	京都大学医学研究科 G 棟セミナー室 A	藤原 PJ の取り組みについて、病院の SW 拡充 G、病院のフィールドワーク G の構成員ならびに京都市の行政保健師など 24 名が集い、学んだ。	48 人
2018 年 10 月 3－4 日	オイゲン・コウ氏ワークショップ	兵庫県立尼崎総合医療センター	「TIC プログラム（ヨーガ、アート、音楽)」	のべ 23 人参加
2018 年 12 月 2 日	市民講座「地域における性教育～子どもへの性被害の現状をふまえて」	姫路市医師会館	医療関係者、行政、教育委員会、警察、市民など子どもにかかわる大人を対象に、「子ども	40 人

[1] ホワイトボードミーティング®　とは、2003 年にちょんせいこ氏が開発した効率的・効果的な話し合いの手法。医療、福祉、教育、市民活動など、異なる領域の人々が集まって進める多職種協働の現場において、互いの強みを生かしながら、エンドユーザー（最終利益享受者＝当事者）に有益な話し合いを進める方法である。

			への性被害の現状および安全な聞き取りを学ぶ講座」として仲真紀子先生はじめ仲プロジェクトと協働し企画した。	
2019 年 1 月 12 日	PJ 講演会・シンポジウム	京都大学	講演会では亀岡智美先生（ひょうごこころのケアセンター）を招聘し TIC 講演会を企画した。その後、各グループリーダーより、グループの研究状況について報告をしてもらった。	44 人
2019 年 3 月 13 日	学校における性被害対応ガイドライン作りにむけた課題共有型えんたく会議	尼崎市立小園中学校	土山希美枝氏(龍谷大学教授・石塚 PJ)をファシリテーターに、尼崎市教育委員会、市内中学校、小学校、こども家庭センター、警察、弁護士、小児科医などが参加し、架空事例に基づきながらガイドラインの必要性を確認しあった。	22 人
2019 年 4 月 13 日	市民講座「地域における性教育～子どもへの性被害の現状をふまえて」	豊岡市民プラザほっとステージ	昨年度に県西部の姫路市で開催した市民講座を 2019 年度は県北部の豊岡市内で開催。仲プロジェクトの協力を得ながら、医療関係者、こども家庭センター、豊岡市教育委員会、学校関係者、民生	45 人

			委員・児童委員、警察、市議会議員など様々な立場の方が参加し、知見を深めた。	
2019 年 5 月 17 日	世界家庭医学会合同シンポジウム３ 医療機関が実践する社会的孤立女性の支援―日本における現状と課題―	京都国際会議場	諸外国の家庭医とともに、日本の社会的孤立女性の現状と、支援実践者の課題を共有した。	約 50 名
2019 年 5 月 18 日	日本プライマリケア連合学会インタレストグループ「困難事例に対するトラウマへの気付きを通じたアプローチ」	京都国際会議場	プライマリケア連合学会員を対象に、トラウマインフォームドケアの導入レクチャーや、フェミニストカウンセリングのロールプレイなどを実施した。	約 50 名
2019 年 6 月 24 日	ワークショップ：オイゲン・コウ氏	神戸市婦人会館	「TIC からみた DV 被害者✕コミュニティケア（えんたく会議）」ひょうご DV 被害者支援連絡会主催	参加者 50 名
2019 年 6 月 26-27 日	ワークショップ、研修会：オイゲン・コウ氏	尼崎総合医療センター	TIC プログラム効果検証と地域への導入、研修会：2019 年 6 月 26 日「Trauma Informed Care @AGMC 報告会」 ワークショップ：「トラウマとコミュニティケア」。医師、弁護士、神戸市子ども家庭センター、NPO 法人性暴力被害者支援センタ	TIC メンバー参加 20 名程度

			ー、民間医療通訳団体、リステックス京都チームが参加	
2019 年夏（複数回）	ワークショップ	兵庫県立尼崎総合医療センター	:「カスタマージャーニーマップ作成」京都大学、ウィメンズカウンセリング京都協力	のべ 35 人参加
2019 年 6 月 24 日	精神医療-その経験の可視化（講演会）	武庫川女子大学	オイゲンコウ博士を招いて行ったトラウマの可視化に向けての講演会	30 名
2019 年 9 月 6 日	「学校における性被害対応ガイドライン」ワーキングをえんたく会議	兵庫県中央労働センター	土山希美枝氏(龍谷大学教授・石塚 PJ)をファシリテーターに潜在的な子ども被害・学校対応 G（毎原氏、岩切氏)および SDoH 地域資源連携 G(周藤氏)の協力を得ながら、尼崎市教育委員会、兵庫県警察本部、こども家庭センター、弁護士、県内の小中学校教員、性暴力被害者支援 NPO、マスコミなどが参加し、ガイドラインに盛り込むべき課題を共有した。	35 人
2019 年 10 月 27 日	ワークショップ「学校での性暴力対応はどうしたらいい？」	同志社女子大学今出川キャンパス	京都、大阪、滋賀、奈良などの学校関係者、支援者などを対象に兵庫の教職員の対応研修グループの学校における性被害対応ガイドラ	74 人

			イン作りに関連したワークショップなどを行った。	
2020/5/1 2020/5/27 2020/7/11 2020/7/18 2020/8/4 2020/8/15 2020/9/19 2020/12/19 2021/6/16	KYOTO SCOPE　オンラインケース検討会	オンライン	DV、依存症、多産、知的障害、住所不定、性風俗、外国人、若年妊娠など、毎回テーマごとのモデルケースをKYOTO SCOPEサイトより抽出し、これについて参加型の多職種検討会をおこなった。毎回他職種の視点が得られること、地域の支援者とつながりができることから、リピート率が高くなっている。	191名(のべ)
2019/10/28 2019/11/11 2019/11/25 2019/12/15 2020/2/7 2020/2/21 2020/2/28	こころアート表現★プロジェクト　ワークショップ	宝塚市文化財団ソリオホール、東大阪市立多目的センター、ウイズあかし	市民に向けて心を表す作品制作ワークショップをアーティストと共に開催	約40名 のべ100名（一回6~10名の参加）
2020/9/19-22 2020/12/4-7	展覧会：トラウマ展-見てないことへの寄り道	西宮ACTA、須磨寺護摩堂、およびオンライン	こころアート表現★プロジェクト　ワークショップで集められた作品を展覧。	1000人以上の来場（アンケート回収は807件）
2020年10月10日	「子ども時代のトラウマ－絵を媒体に考える」シンポジウム	オンライン	特定非営利活動法人umidas耕作所 理事長 衣笠 収、尼崎市教育委員会 川西 勝、県立尼崎総合医療センター小児科医 毎原 敏郎、	50名

			武庫川女子大学 准教授 大岡 由佳、アーティスト 高濱 浩子の登壇者で絵をバックに対談。	
2021 年 1 月 30 日	「トラウマが与える影響とは―トラウマインフォームドな社会に向けての発信」	オンライン	公私領域関係者の協力を得て行ったシンポジウム。基調講演は友田明美氏。	事前申込 753 件（769 名）参加者 628 名

６―１―２．書籍、DVD など論文以外に発行したもの

・『問題行動の背景をトラウマの視点から考えてみよう』（パンフレット）毎原敏郎、大岡由佳他、トラウマインフォームドケア学校プロジェクト事業、2018年3月20日
・バーチャル・ワンストップ支援センターぷちカード、2018年6月
・クリアファイル(地域における性教育の一般目標と行動目標をプリントしたもの)、2018年11月
・バーチャル・ワンストップ支援センター広報チラシ、2019年1月
・性暴力被害者対応 急性期医療マニュアル
・周藤由美子、内閣府男女共同参画局「女性に対する暴力の根絶」ウェブサイト（「性犯罪・性暴力とは」記事内にTICについて掲載
http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/index.html
・広報誌「科研費NEWS2018Vol.3」p17.（科研費からの成果展開事例：トラウマインフォームドなケア（TIC）の発想に基づくケアシステムの構築：大岡由佳）
・小冊子「こころの器が壊れるとき―支援者のためのトラウマ体験・理解プログラム―」トラウマ体験・理解プログラムコアメンバーズ著（代表　久留米大学　大江美佐里）、2019年 10 月
・TIC パンフレット『困った人は困っている人』武庫川女子大学精神保健福祉研究室、2020年 1 月末
・マタニティマップ、兵庫県立尼崎総合医療センター、2020 年 2 年 2 月
・冊子「学校で性暴力被害がおこったら　被害・加害児童生徒が同じ学校に在籍している場合の危機対応手引き」、web にも掲載 2020 年 6 月
https://onestop-hyogo.com/partnership/atschool
・大岡由佳：冊子『トラウマ展―みてないことへの寄り道』「こころアート表現★プロジェクト」2020 年 9 月 19 日.1-89.　SNS や個人ブログ等で取り上げられ拡散。
・田口奈緒：インタビュー「いろいろなことがあるけれどすべて私の人生と思えるように

トラウマインフォームドケア」アートミーツケア叢書第 3 巻　2021 年 6 月刊行
・『トラウマの伝え方：事例でみる心理教育実践』(大江美佐里編著) 第 13 章 支援者支援—トラウマ・インフォームドケア理解の心理教育（大岡由佳). 2021 年 10 月刊行予定.

6—1—3．ウェブメディア開設・運営

・バーチャル・ワンストップ支援センターぷち　2018 年 6 月
https://onestop-hyogo.com
・内閣府男女共同参画局 HP　女性に対する暴力の根絶→性犯罪・性暴力とは　の頁の職務関係者の方への原稿を担当し、TIC の視点を紹介した。
http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/seibouryoku/index.html
・Web サイト KYOTO SCOPE　2020 年 6 月開設　アクセス数約 20,000(2021 年 3 月現在)
https://kyoto-scope.com
・ 京都大学リプロダクティブ・ヘルス＆ライツライトユニット(SRHR-LU) 2021 年 1 月開設
本研究から得た知見をもとに、日本のリプロダクティブ・ヘルス＆ライツを学際的に研究する場を京都大学に設立。学内外から問い合わせ多数。
https://srhr.jp、
http://www.cpier.kyoto-u.ac.jp/unitlist/srhr-unit/
・包括的性教育とトラウマインフォームドエデュケーションをテーマに SRHR-LU で行ったイベントを YouTube 配信。当日参加者 230 名、2021 年 2 月 14 日に動画アップ後、動画再生回数は 2317 回（2021 年 3 月 26 日現在）
https://www.youtube.com/watch?v=erfST4HgdDU
・男女共同参画センターの FB、Twitter で、KYOTO SCOPE を紹介した記事が拡散された。2020 年 12 月 24 日
https://note.com/wings_pcafe/n/nadcba8a7e759?fbclid=IwAR0kPx2p0ADKByKIG3GUSBiZRWJVNFpjW00DRA0LEZv0FnPprzzKJnIao6o
・Youtube 動画生配信＃めちゃ大事で KYOTO SCOPE を紹介。KYOTO SCOPE の他地域開のニーズが語られた。https://youtu.be/hRkfYeS61Zw
・『トラウマ展』特別企画：トークセッション.2020 年 9 月 15 日 youtube 発信.
https://www.youtube.com/watch?v=2Ph8d0YFfwk　(3738 回視聴　2021 年 3 月時点)
・Facebook『トラウマ展　みてないことへの寄り道』(170 人がフォロー中　2021 年 3 月時点)

6—1—4．学会以外のシンポジウムなどでの招へい講演　など

・大岡由佳「トラウマについて - TICの視点から」『トラウマを多面的に理解する』兵庫県精神保健福祉士協会阪神ブロック研修会　2017年11月17日（於：西宮市民センター）
・大岡由佳「地域定着支援と対象者理解 - TICの視点から」2017年度よりそい専門研修会.一

般社団法人よりそいネットおおさか.2018年2月8日　（於：大阪社会福祉指導センター）

・大岡由佳「被害者支援における多機関連携―トラウマ・インフォームドケアの視点の必要性―」兵庫県被害者支援連絡協議会　於：兵庫県警察本部21階大会議室　2018年5月10日

・大岡由佳「TIC（Trauma Informed Care）を学ぶ～救急場面で傷ついた患者を診る、看るために～」兵庫県立尼崎総合医療センター看護部研修　於：兵庫県立尼崎総合医療センター　2018 年 5 月 31 日

・大江美佐里「STAIR:複雑性 PTSD への認知行動療法」明治安田こころの健康財団集中講座「トラウマ処理とその周辺 4」於：愛知県名古屋市:明治安田生命名古屋ビル　2018 年 7 月 7 日

・大江美佐里「被災後のこころのケア　理解と対応　―トラウマ反応と悲嘆について―」平成 30 年度　災害・事故時のこころのケア対策事業専門研修　於北九州市総合保健福祉センター　アシスト 21　2018 年 10 月 26 日

・大江美佐里「DV・性暴力被害者のトラウマについて」久留米市男女平等推進センター相談員研修　於：久留米市男女平等推進センター　2018 年 11 月 29 日

・大江美佐里「災害後のこころのケア」朝倉市災害後のこころのケア講演会　於：朝倉市杷木林田仮設住宅集会所　2019 年 1 月 23 日

・大江美佐里「災害後のこころのケア」朝倉市災害後のこころのケア講演会　於：朝倉市甘木頓田仮設住宅集会所　2019 年 2 月 20 日

・大岡由佳「トラウマインフォームドケア（TIC）の視点から考える支援（対人援助技術の向上）」大阪矯正管区主催. 2019年6月7日　大阪合同庁舎.

・大江美佐里. 複雑性PTSDに対する理解と対応. 平成31年度長崎県高等学校・特別支援学校教育研究会学校保健部会佐世保支部講演会(2019年6月21日長崎県佐世保市　佐世保中央高等学校)

・池田裕美枝「婦人科疾患の予防とプレコンセプションケア」第155回指導者のための否認と性感染症予防セミナー（SRHセミナー）　2019年6月22日　御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンター

・池田裕美枝「ERでのトラウマインフォームドケア」臨床研修医向け救命救急・総合診療系セミナーERアップデート2019in沖縄　2019年7月5日　Royal Hotel 沖縄残波岬

・大江美佐里.C-PTSDへのCBTマインドを持った治療実践.2019年度発達障害・専門講座2　複雑性PTSDとその治療(公益財団法人明治安田こころの健康財団主催　講演2019年7月7日愛知県名古屋市明治安田生命名古屋ビルホール)

・田口奈緒「いま必要な性教育とは　自分を大切にするということ」第41回近畿学校保健連絡協議会　2019年7月25日　兵庫県民会館　けんみんホール

・田口奈緒　仙台（2019年10月18日仙台エルソーラ）、福岡（2019年11月1日福岡被害者支援センター）、香川（2019年12月15日オリーブかがわ）での性暴力被害者対応研修会において全国ワンストップ支援センターインタビュー調査結果紹介

・池田 裕美枝「女性医療とリプロ」令和元年度周産期医療コースフォーラム　助産師に求められるウィメンズヘルス　(2020年2月9日　神戸大学医学部神緑館多目的ホール)
・大江美佐里. 被災後のこころのケア　トラウマと悲嘆への対応. 令和元年度　災害・事故時のこころのケア対策事業専門研修(2019年11月7日北九州市　北九州市総合保健福祉センター　アシスト21)
・大江美佐里. 児童虐待の気づきと対応. 令和元年度　八女筑後地区学校保健会　合同研修会　(2019年11月8日 筑後市　筑後市北部交流センター「チクロス」ホール1・2)
・大岡由佳「TIC：トラウマインフォームドな視点から考える支援」みらいず主催. 2019年12月8日.梅田第2ビル.
・大岡由佳「トラウマインフォームドケアの視点からの関わり」令和元年女子受刑者の特性に応じた処遇プログラムに係る研修会. 大阪矯正管区主催. 2019年12月16日. 大阪矯正管区.
・福岡ともみ　京都(2020年10月24日京都性暴力被害者ワンストップ相談支援センターSARA)奈良(2020年11月12日奈良県性暴力被害者サポートセンター)の支援員など対象研修で「学校で性暴力被害がおこったら」について紹介。京都(2021年2月8日京都性暴力被害者ワンストップ相談支援センターSARA) 高知(2020年2月14日こうち被害者支援センター) 性暴力被害者対応研修会において全国ワンストップ支援センターインタビュー調査結果紹介
・大岡由佳. トラウマインフォームドケアとは？～トラウマとアディクションを考える.日本アルコール関連問題ソーシャルワーカー協会関西支部例会. (令和 2 年 9 月 24 日. 尼崎市小田南生涯学習センター大ホール)
・大岡由佳「トラウマインフォームドケア（ＴＩＣ）の視点から考える支援」一般社団法人よりそいネットおおさか主催. 2020年12月19日. 大阪社会福祉会館.
・大岡由佳「トラウマインフォームドケアってなに？」性暴力被害者支援センター・ひょうご主催. 2020年1月26日.兵庫県立尼崎総合医療センター.
・大江美佐里. 子どものトラウマと心理教育. 令和元年度福岡県内判定課長及び心理相談員研究協議会(2020年1月24日 久留米市北筑後教育事務所2階会議室)
・第 166 回「指導者のための避妊と性感染症予防セミナー 」女性に急増する性感染症・梅毒と女性への社会的処方　2020 年 10 月 31 日新潟朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター、参加者約 70 名。好評にて後日日本家族計画協会より、有料でオンライン配信された。
・池田裕美枝. パープルカフェオンライン「“トラウマインフォームドケア”ってなに？」2020 年 11 月 28 日、京都市男女共同参画センター主催の、地域の女性支援団体や当事者によるオンラインカフェに招聘され、KYOTO SCOPE を紹介した。参加者約 30 名
・池田裕美枝. 兵庫県助産師会 2020 年度助産師のちからアップオンライン研修会　「思いがけない妊娠 SOS~セクシュアルリプロダクティブ・ヘルス・ライツの今～」セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルスを実践する際のトラウマインフォームドケアの重要性を解

説。参加者 300 名（2020 年 12 月 1 日～2021 年 1 月 31 日配信）

・大岡由佳. 若者への性暴力-トラウマインフォームド・ケアの視点から考える.令和 2 年度子供・若者育成支援のための地域連携推進事業.（令和 2 年 12 月 1 日　国立オリンピック記念青少年総合センター）

・大岡由佳. 第 1 回 TIC 勉強会. トラウマインフォームドケアとは？. 事例検討-トラウマインフォームドな視点から考える.日本精神保健福祉士協会　刑事司法精神保健福祉委員会主催.(令和 2 年 12 月 12 日.ZOOM)

・大岡由佳. トラウマインフォームドケア（ＴＩＣ）の視点から考える支援. 尼崎市教育員会事務局学校教育部　こども教育支援課　SSW 研修会（令和 2 年 12 月 23 日.子どもの育ち支援センターいくしあ）

・大岡由佳. トラウマインフォームドケアとは？. 有薗基金 DV 支援コラボ企画.（令和 3 年 1 月 7 日. トレピエ）

・池田裕美枝. 第 6 回日本女性財団勉強会　シスターフッドで創る女性のサポートシステム～今求められている実効性のある支援システムとは～2021 年 1 月 17 日（日）10:00～12:00、オンライン、様々な女性支援団体が集う場で KYOTO SCOPE の取り組み紹介をした. 参加者約 100 名後日オンライン配信予定

・大岡由佳. 自殺対策とトラウマインフォームドケア.尼崎市自殺対策研修.(令和 3 年 2 月 25 日.尼崎市保健福祉センター)

・大岡由佳.性暴力被害者支援における多機関連携に必要な視点―トラウマインフォームドケア. 特定非営利活動法人 Safety First 静岡 関係機関研修.（オンデマンド開催：令和 3 年 2 月 15 日～3 月 5 日）

・大岡由佳. 第 2 回 TIC 勉強会. はじめに（TIC とは）. 当事者の声を聴く. 日本精神保健福祉士協会　刑事司法精神保健福祉委員会主催.(令和 3 年 3 月 13 日.ZOOM)

・池田裕美枝.奈良県助産師会　SDGｓからみるリプロダクティブ・ヘルスの課題　2021 年 5 月 8 日 zoom　参加者 164 名

・池田裕美枝. 第 171 回「指導者のための避妊と性感染症予防セミナー 」新型コロナウィルス感染症で脅かされているリプロダクティブヘルスの諸課題 2021 年 7 月 3 日トラストシティカンファレンス仙台、参加者約 70 名。

・池田裕美枝.市川市薬剤師会　OC/LEP と更年期、トラウマインフォームドケア　2021 年 8 月 26 日 zoom　参加者 102 名

６－２．論文発表

６―２―１．査読付き（　５　件）

(1) 大岡由佳. 精神科領域におけるTICの必要性精神保健福祉.vol.49.no.1,2018.

(2) 大岡由佳、毎原敏郎、箕浦洋子.安全・安心なトラウマインフォームドな医療現場を目指して―看護師のメンタルヘルス調査の結果から―. 人間学研究32:21-29,

2020.
(3) 大岡由佳、池田裕美枝、大江美佐里、 周藤由美子、田口奈緒、中山健夫、主田英之、毎原敏郎、矢野阿壽加 ″人-地域-社会″を結ぶトラウマインフォームドケアの実践. 精神保健福祉,51(1):83.2020.
(4) 田口奈緒、荒木智子、中島文香、片岡裕貴：妊娠中のパートナーからの暴力は産科合併症と関連するか？ケースコントロール研究. 日本周産期・新生児医学会誌第 57 巻第 2 号（2021 年 9 月発行）
(5) 大岡由佳. 絵という媒体を通じて見えてきた精神障害をもつ人々のトラウマ―トラウマインフォームドケアの実践活動から―.人間学研究 33,2021.

６―２―２．査読なし（　21　件）

(1) 大江美佐里，小林雄大，石田哲也，千葉比呂美：ストレス関連症. 分子精神医学 19 (4):212-216, 2019.
(2) 大江美佐里. トラウマの診断・評価の現状と課題. こころの科学 208 (11):19-23, 2019
(3) 大江美佐里，千葉比呂美. STAIR-NTおよび関連治療技法が目指すもの. 杉山登志郎編：こころの科学増刊号　発達性トラウマ障害のすべて　84-89, 2019
(4) 大岡 由佳. 精神科領域におけるトラウマインフォームドケアの必要性(会議録). 精神保健福祉. 49巻1号p55.2018.
(5) 大岡由佳・岩切昌宏. 精神障害者とトラウマに関する一考察 -トラウマインフォームド・ケア（TIC）の視点から- 学校危機とメンタルケア.第11巻p15-30.2019.
(6) 中村有吾・瀧野揚三・岩切昌宏. 米国マサチューセッツ州におけるトラウマセンシティブスクールの実際.学校危機とメンタルケア.第11巻p1－14. 2019.
(7) 周藤由美子「性暴力というトラウマを抱えた女性を連携して支援するための方法と課題」フェミニストカウンセリング研究VOL.16,2019.
(8) 浅井鈴子,岩切昌宏,大岡由佳,瀧野揚三,中村有吾,毎原敏郎. 学校におけるトラウマインフォームドケアの実践（第Ⅰ報） －中学校への介入研究の結果から―.学校危機とメンタルケア.第12巻:25－32,2020.
(9) 池田裕美枝 「ライフサイクルを通じた SRHR ガールズエンパワメント！」 家族と健康 800 号 p4-5,2020
(10) 大江美佐里. トラウマ・インフォームド・ケア　傷を理解して接する. 臨床心理学 20 (1):39-42, 2020
(11) 大岡由佳,岩切昌宏,瀧野揚三,浅井鈴子,毎原敏郎,木村有里. 学校におけるトラウマインフォームドケアの実践（第Ⅱ報） － X市の教員全体を対象にした性被害・性加害研修の結果から―. 学校危機とメンタルケア. 第12巻,33-44,2020.
(12) 大岡由佳. これからの更生保護に必要な視点―トラウマインフォームドケア―.特集：

これからの更生保護事業.更生保護　令和2年12月号.
(13)田口奈緒「地域における性教育～子どもへの性被害の現状をふまえて」兵庫県医師会報No.777,2020.
(14)田口奈緒「アートによるトラウマインフォームドケアの試みートラウマが与える影響を可視化する」アートミーツケア　オンラインジャーナル　vol.12 2020年3月31日発行 https://artmeetscare.org/wp-content/uploads/2021/03/N.Taguchi_vol12_12-22.pdf
(15)池田裕美枝、特集：女性医療の「困った」を乗りきる～IPV～治療　Vol.103.No.3 page 2021年03月発行
(16)岡田唯男、池田裕美枝、特集：女性医療の「困った」を乗りきる～意思決定が困難な女性へのケア～治療　Vol.103.No.3 Page　2021年03月発行
(17)池田裕美枝、特集コロナ禍のウィメンズヘルス　～DV・性暴力・若年妊娠の問題、月刊地域医学　Vol.35／No.3　page　2021年03月発行
(18)大岡由佳．第1回　トラウマ・インフォームドケア（TIC）概論.連載タイトル：　トラウマ・インフォームドケア特集―トラウマレンズをかけていますか？．PSW通信第230号（1月15日発行）
(19)大岡由佳・柏木一慧．　第2回　トラウマ・インフォームドケア（TIC）―精神医療編.連載タイトル：　トラウマ・インフォームドケア特集―トラウマレンズをかけていますか？．PSW通信第231号（3月15日発行）
(20)大岡由佳・岩切昌宏・瀧野揚三・浅井鈴子・毎原敏郎．絵という表現活動を通して見えてくる子ども時代のトラウマ―トラウマインフォームドケアの実践―．学校危機とメンタルケア．第13巻,2021.
(21)池田裕美枝編著　内診台がなくてもできる女性診療～外来診療からのエンパワメント　日本醫事新報社　2021年7月発刊

６－３．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

６―３―１．招待講演（国内会議　1　件、国際会議　0　件）

(1) 大岡由佳　特別講演「医療機関におけるトラウマインフォームドケア」第 276 回 日本小児科学会兵庫県地方会．　2019年2月2日　於：市民健康開発センター　ハーティ21（尼崎）

６―３―２．口頭発表（国内会議　22　件、国際会議　0　件）

(1) 周藤由美子「京都SARAの活動から」第17回日本フェミニストカウンセリング学会　分科会H　フェミニストカウンセリングの性暴力被害者支援、福岡県春日市福岡県男女共同参画センターあすばる、2018年5月
(2) 大江美佐里「心理療法の共通性を実践につなげる工夫」第17回日本トラウマティック・

ストレス学会　シンポジウムB-3　トラウマへの心理社会的アプローチ―導入可能性を高める工夫―、別府市ビーコンプラザ)、2018年6月10日

(3) 周藤由美子「京都性暴力被害者ワンストップ相談支援センター（京都SARA）における相談支援」第17回日本トラウマティック・ストレス学会　シンポジウムB-4　ジェンダーの視点での性暴力被害者支援を地域に広げる、別府市ビーコンプラザ、2018年6月10日

(4) 大江美佐里、石田哲也、松岡美智子、内村直尚「逆境に直面する人々に対する非専門家による心理介入（PM＋）：本邦での普及にあたっての課題」第114回日本精神神経学会学術総会、兵庫県神戸市　神戸国際会議場、2018年6月23日

(5) 大岡由佳、伊藤冨士江、大塚淳子「犯罪被害者支援における実質的支援の必要性――TIC（トラウマインフォームドケア）の視点から」日本社会福祉学会第66回秋季大会、金城学院大学、2018年9月9日

(6) 周藤由美子「ワンストップセンターにおける機関連携とTIC」第18回NPO法人日本フェミニストカウンセリング全国学会東京大会分科会「性暴力被害者支援とトラウマインフォームドケア(TIC)」　ウィリング横浜　2019年5月26日

(7) 福岡ともみ「ワンストップセンターインタビュー調査中間報告/オーストラリアのワンストップセンター報告」第18回NPO法人日本フェミニストカウンセリング全国学会東京大会分科会「性暴力被害者支援とトラウマインフォームドケア(TIC)」　ウィリング横浜　2019年5月26日

(8) 大岡由佳、大塚淳子、伊藤冨士江「犯罪被害者支援の多機関連携調査の実態からみえてくるもの」「犯罪被害者の権利擁護とサポート」第18回日本トラウマティック・ストレス学会.京都テルサ.2019年6月16日.

(9) 田口奈緒「パートナーからの暴力（IPV）と周産期合併症の関連に関する調査（パイロットスタディ)」第140回近畿産科婦人科学会学術集会　ホテルグランヴィア大阪　2019年6月16日

(10) 周藤由美子「京都ＳＡＲＡにおけるトラウマケアとＴＩＣ」第18回日本トラウマティック・ストレス学会大会　シンポジウム「性暴力被害者支援について地域の関係機関への理解や連携の輪を広げるには」京都テルサ　2019年6月17日

(11) 大岡由佳「″人-地域-社会″を結ぶトラウマインフォームドケアの実践.」第18回日本精神保健福祉士学会学術集会.名古屋国際会議場.2019年8月31日.

(12) 大岡由佳「障害者施設職員のメンタルヘルス調査 からみる労働状況（2）－いじめ・セクハラ・パワハラの実態に焦点をあてて」日本社会福祉学会.大分大学.2019年9月22日.

(13) 池田 裕美枝「繰り返す人工妊娠中絶，社会的ハイリスク妊婦，被虐待，虐待加害は病院で認識・対応されているか〈病院職員対象の質問紙調査〉」第34回日本女性医学学会学術総会　ヒルトン福岡シーホーク2019年11月3日

(14) 田口奈緒「性暴力被害者支援センター全国インタビュー調査～病院拠点型は最適解

か？～」第34回日本女性医学学会学術総会　ヒルトン福岡シーホーク2019年11月3日

(15)田口奈緒「アートとヨガによるTIC（プログラム）」第17回癒しの環境研究会　全国大会（25周年記念大会）　日本医科大学 2019年11月10日

(16)田口奈緒「トラウマインフォームドケア～トラウマが与える影響を可視化する～」アートミーツケア学会　近畿大学　2019年11月23日

(17)大岡由佳「トラウマインフォームドな実践―アートでみる精神障害者のトラウマ」第 19 回日本トラウマティック・ストレス学会.オンデマンド配信.2020 年 8 月.

(18)井上千秋、荒木智子、田口奈緒：ハイリスク妊婦のトラウマインフォームドケアプログラムとしてのヨーガ療法日本ヨーガ療法学会学術大会、2020 年 9 月

(19)大岡由佳「絵という媒体と通して見えてくる精神障害者らのトラウマ」第 56 回公益社団法人日本精神保健福祉士協会全国大会・第 19 回日本精神保健福祉士学会学術集会.オンデマンド配信.2020 年 9 月.

(20)荒木智子、田口奈緒：トラウマインフォームドケアとしてのヨガで更年期症状が緩和された一例. 第 35 回日本女性医学学会学術大会（web）、2020 年 11 月

(21)荒木智子、井上千秋、田口奈緒：女性に対する Trauma Informed Care を用いた回復アプローチ. 第 7 回日本運動器理学療法学会. 岡山、2021 年 10 月

(22)田口奈緒、荒木智子、沼眞規子、今村裕子：COVID－19 患者に対する トラウマインフォームドケアプログラムの試み. 第 35 回日本女性医学学会学術大会（web）、2020 年 11 月

６－３－３．ポスター発表（国内会議　6　件、国際会議　0　件）

(1) 大岡由佳・山田嘉則「トラウマ・インフォームド・ケアの射程ートラウマ理解に基づく人-地域-社会とは？」（ポスター発表）障害学会　第14回　神戸学院大学　2017年10月28－29日

(2) 石田哲也、松岡美智子、小林雄大、大江美佐里、内村直尚「周産期病棟に勤務する看護師・助産師の職場ストレスと期待する職場環境」第17回日本トラウマティック・ストレス学会　ポスターセッション　大分県別府市　ビーコンプラザ　2018年6月9日

(3) 荒木智子「高度医療機関におけるTrauma　Informed Careプログラムの実践」第34回日本女性医学学会学術総会　ヒルトン福岡シーホーク　2019年11月3日

(4) 池田裕美枝「社会的孤立状態にある女性に対する病院ソーシャルワーカーの実践と課題」第34回日本女性医学学会学術総会　ヒルトン福岡シーホーク　2019年11月3日

(5) 池田裕美枝、第2回日本心身医学関連学会合同集会「病院職員による社会的孤立者との遭遇とその対応 ー病院職員対象の質問紙調査ー 」大阪市中央公会堂　2019年11月17日

(6) 周藤由美子、第 19 回日本トラウマティック・ストレス学会大会「潜在化したトラウマを抱える患者を TIC の導入により地域社会資源につなげるシステムの構築に向けて」

オンライン開催　2020 年 9 月 21 日～10 月 20 日

６－４．新聞報道・投稿、受賞など

６―４―１．新聞報道・投稿

・朝日新聞、2019年9月4日、「（彼女の選択）内科医から、２７歳で転身　産婦人医・池田裕美枝さん　女子組」女性が受ける社会的圧力からの心身の不調に取り組む産婦人科医として紹介された。

・京都新聞、2019年10月28日、「上京、校内の性暴力テーマに講座　『被害受けた子　負担かけない』という見出しで10月27日にSDoH地域資源連携グループのウィメンズカウンセリング京都が主催して兵庫の教職員の対応研修グループの福岡、田口が講師、ファシリテーターとして参加したワークショップが紹介された。

・MBS、2019年12月17日、「事故で兄を亡くした妹の複雑な思い　親を気遣い気持ちを押し込めるきょうだいへの支援「グリーフケア」」きょうだいを亡くした者にTICによるARTワークショップ（ファシリテーター：大岡由佳）を撮影され紹介された。
https://www.mbs.jp/mint/news/2019/12/18/073941.shtml

・毎日新聞/大阪、2020年3月18日、「ひと人　包括的な性教育、目標に　リスクと予防伝える　産婦人科医・池田裕美枝さん」社会的孤立の連鎖を断ち切るために包括的性教育が重要との認識から、性教育活動の他に研究にも従事していることを紹介された。

・大阪毎日新聞、2020 年 3 月 18 日、地方版朝刊、連載ひと人「包括的な性教育、目標に　リスクと予防伝える　産婦人科医・池田裕美枝さん

・神戸新聞朝刊阪神版(2020 年 7 月 4 日付)に兵庫県立尼崎総合医療センターで実施されているヨーガやアートで心とからだを癒すプログラム（トラウマインフォームドケア プログラム）が紹介された

・神戸新聞、2020 年 9 月 11 日,、心に秘めた思い自由に描き解放　西宮で１９～２２日「トラウマ展」
https://www.kobe-np.co.jp/news/hanshin/202009/0013683716.shtml

・高知新聞、徳島新聞、長崎新聞、等 10 数社（共同通信記事）2020 年 9 月 20 日～30 日、大岡由佳．若年層の性被害深刻．ケアと教育の充実を.リステックス成果物である『困った人は困っている人』『学校で性暴力被害が起こったら』『トラウマの背景を考えよう』リーフレットの紹介もあり。

・秋田さきがけ、京都新聞等（共同通信社記事）2020 年 10 月 15 日、トラウマ描いた作品展-心の傷に思いを寄せて 19 日からオンライン。

・神戸新聞、2020 年 11 月 13 日、見る思う「犯罪被害者の苦しみ　知ってほしい」武庫川女子大学准教授・大岡由佳さん．トラウマ展や定着支援の動向についても掲載。

６―４―２．受賞

なし

６―４―３．その他

・周産期医療コースフォーラム「助産師に求められるウィメンズヘルス」2020 年 2 月 7 日に周産期ケアにおけるトラウマインフォームドケアの重要性を講義した内容が好評であったために、3 月に動画撮影し教材化、アドバンス助産師ウィメンズヘルスコースの教材として日本助産評価機構より 2020 年 5 月から 10 月配信された。

・内閣府及び文部科学省の共同事業 「令和 2 年度 性犯罪・性暴力の加害者・被害者・傍観者にならないための「生命の安全教育」調査研究事業」報告書にて、「危機対応の手引き」（教職員の対応研修 G 作成）が取り上げられた。2021 年 4 月に内閣府ウェブサイト https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/r02_inochi.html 上で公開された。

６－５．特許出願

６―５―１．国内出願（　0　件）

６―５―２．海外出願（　0　件）

７．領域のプロジェクトマネジメントについてのご意見や改善提案（任意）

シンポジウム開催の際に、領域全体の取り組みが示されることで、行ってきた研究開発の目的が明確化され、意義あるシンポジウムとなった。科学研究費と異なり、よりよい研究の方向性に向けて、多様な示唆を頂き、様々な領域の研究者との接点を持てたことは、本プロジェクトの魅力だと考えられた。

８．その他（任意）

なし